TOTO 通信

2023年夏号

Toward a Creative Architectural Scene

Special Feature

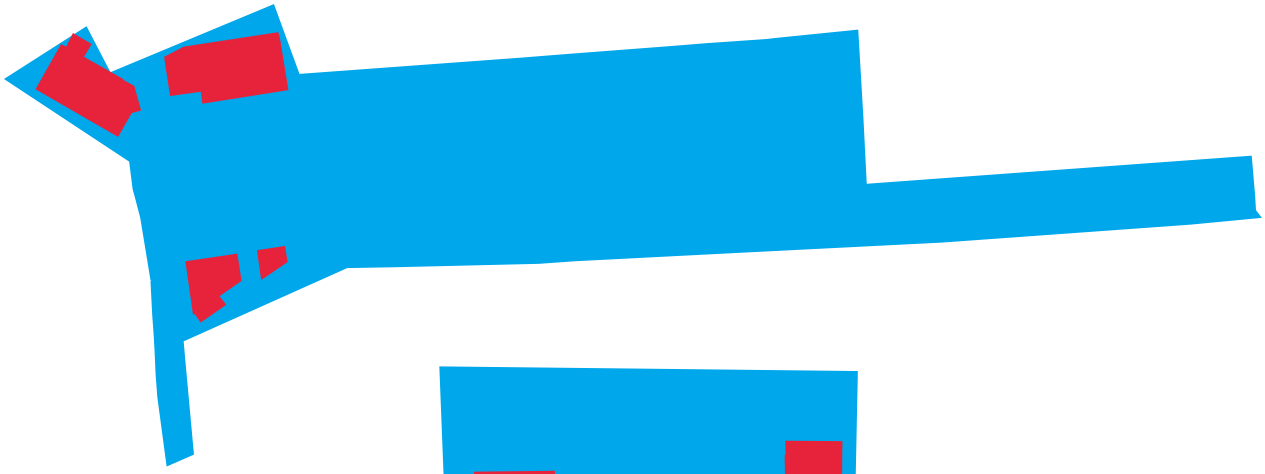
Large-Area Design by Architects

特集／建築家が〝面〟をデザイン

〝面〟をデザイン

Special Feature
Large-Area Design
by
Architects

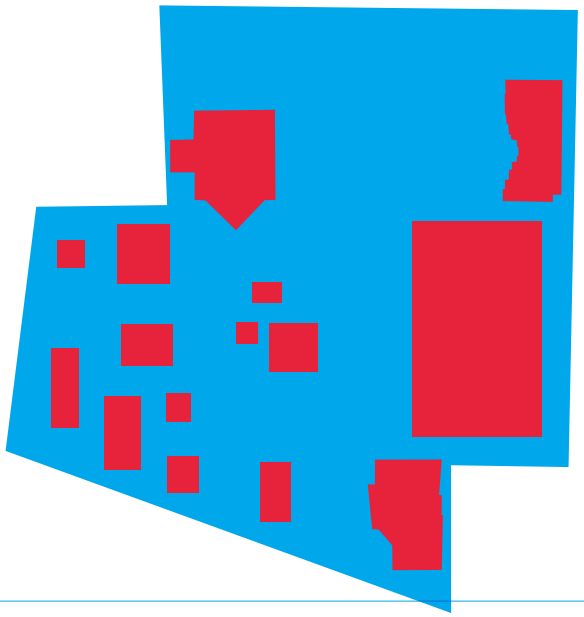
土地の所有が細分化されている日本では、デザインが統一された建築群による街並みをつくることは難しい。建築家も個別の建築のデザインではすぐれた腕を発揮するが、複数棟の建築をデザインして面的に街をデザインできることは稀だ。しかし最近では、個人の地主が建築家と組んだり、大きな企業や行政が建築家と組むことによって、面的なデザインに参画している建築家の作品が目立つようになってきた。単体の建築がよくても、それが群となったときにもよく見えなくては。それは機会に恵まれないとなかなか難しいのだが、その機を得た建築家たちの「面のデザイン」を、特集していく。



Case Study
04

林を彫刻する

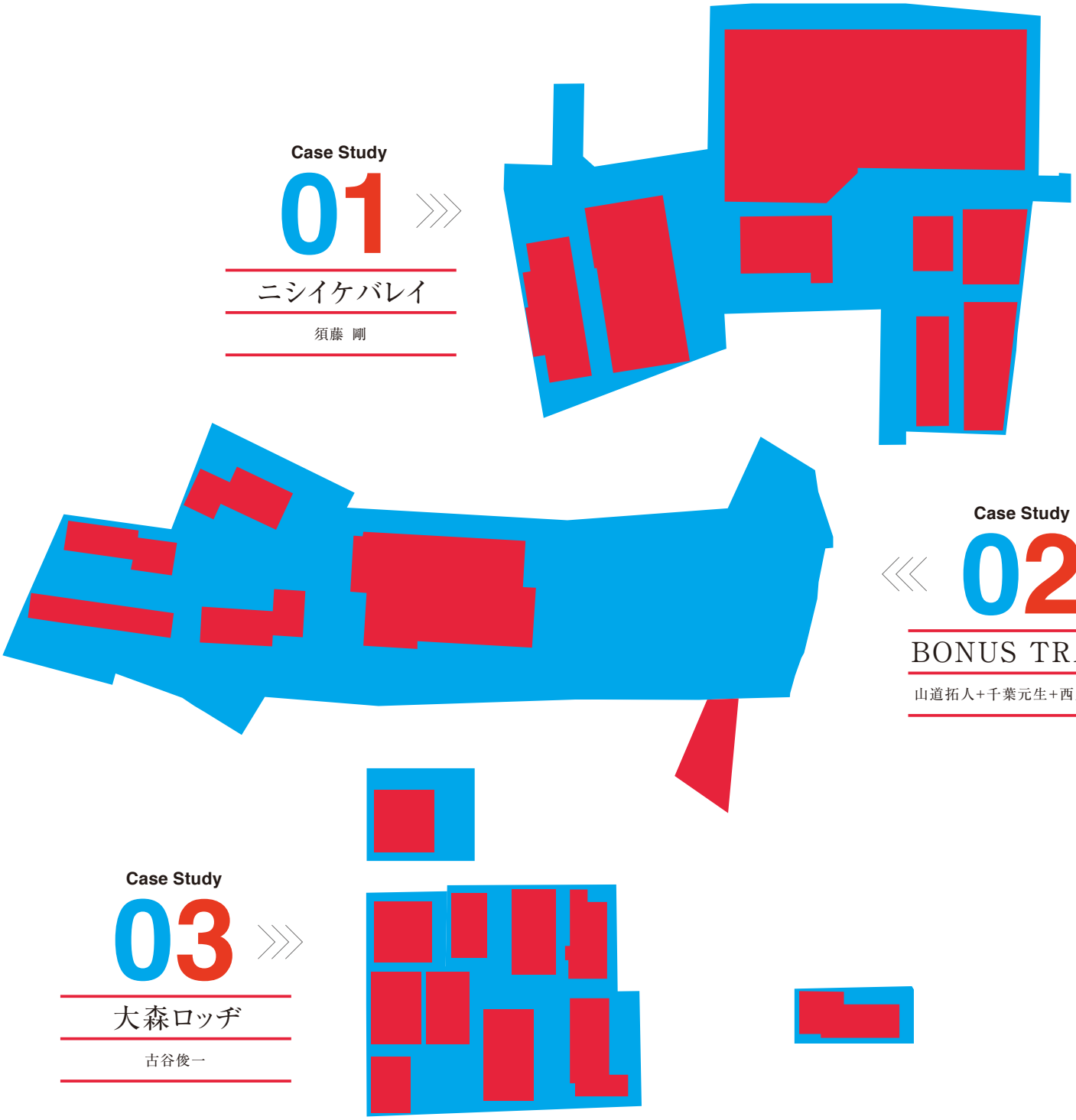
藤野高志



須藤 剛×藤野高志	4	
須藤 剛	10	
山道拓人+千葉元生+西川日満里	18	
古谷俊一	26	
藤野高志	34	
シリーズ 古写真でみる建築家のアトリエ5	文／山村 健 ルイス・イザドア・カーン	42
現代住宅併走56	「八ヶ岳の家」 設計／吉村順三 文／藤森照信	44
最新水まわり物語62	東急歌舞伎町タワー	50
TOTOギャラリー・間で展覧会をします	西澤徹夫展 偶然は用意のあるところに	56
News File	TOTO News, Cera Trading News, Book	58

表紙／「BONUS TRACK」のアイソメトリック。
編集制作／伏見編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

特集／建築家が



Case Study
01
ニシイケバレイ
須藤 剛

Case Study
02
BONUS TRACK
山道拓人+千葉元生+西川日満里

Case Study
03
大森ロッヂ
古谷俊一

TOTO
通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 534
Summer 2023

対談	時間と想いの積層が、〝面〟をデザインする	
ケーススタディ1	ビルの谷にコミュニティをつくる	「ニシイケバレイ」
ケーススタディ2	街に溶け込む線路跡地の商店街	「BONUS TRACK」
ケーススタディ3	新築もリノベも、緑がつなぐ	「大森ロッヂ」
ケーススタディ4	樹木を屋根にした建築群	「林を彫刻する」

『TOTO通信』は
インターネットでも
ご覧いただけます。
https://jp.toto.com/pages/knowledge/useful/tototsushin/

時間と想いの積層が、〝面〟をデザインする

一つひとつの建築をデザインするだけでなく、
それが複数連なっていくときに、重要なこと、求められることは何か。
建築家が面のデザインに見出す可能性とは。
面のデザインを実践する須藤剛さんと藤野高志さんに話を聞いた。

ケーススタディ4「林を彫刻する」の建築家

藤野高志

Fujino Takashi

対談

ケーススタディ1「ニシイケバレイ」の建築家

須藤剛

Sudo Tsuyoshi

聞き手・まとめ／伏見唯、杉前政樹（まとめ）　写真／桑田瑞穂

ニシイケバレイの「チャノマ」横にて。建物（右）と私道（左）の間の塀を取り払い緑に置き換えることで、ゆるやかな境界をデザイン。ふたりが手にもつのはそれぞれが設計したエリアの平面図・配置図

Special Feature
Large-
Area
Design
by
Architects

Discussion

引き算のデザインで境界をぼかす

——まずは「ニシイケバレイ」(10〜17ページ)を手がけられてきた須藤剛さんからうかがいます。どのようにプロジェクトを進められましたか。

須藤　敷地は池袋駅から徒歩数分ほどの、大通りから1本入った場所です。築25年ほどの14階建て賃貸マンションと、築70年ほどの平屋一戸建て、築50年ほどの2階建て木造アパート、築30年ほどの4階建て鉄筋コンクリートマンションを深野弘之さんというオーナーが所有していて、年代も構造もみごとにバラバラです。なんの共通項もないので、まずは中と外をつなぐことを考えました。平屋一戸建ての改修から手をつけることになり、最初に庭を囲っていたコンクリート塀を壊し、さらに壁を木製框戸の引き戸に置換して透明性を高め、内部の床と外構の床仕上げに一体感をもたせ、中と外を区切る線を「ぼかし」ました。そのうえで、隣の建物とのあいだで建具の材質やパーゴラの素材感などに統一のデザインコードをもたせて、中と外、外と中が連歌的、しりとり的につながることで、ここがひとつの地域であることを感じられるように改修範囲を広げていきました。

藤野　実際に現地に来て、ここの「場所の力」への信頼というものを強く感じましたね。たとえば私道のアスファルトの舗装を三角形に切ったら、その背後には土があるわけで、その切れ目に樹を植えられるというのは、「裏側に何があるのか」を見せてくれるデザインとも言えます(17ページ)。そういう見えている世界の向こう側へのまなざしを濃密に感じます。

須藤　そうなんです。塀を取り除くという行為ひとつでも、そこにあったモノが「なくなっていく快感」が生まれるんですよ。塀は外から守っているようで、むしろ庭を隠している。他者を隠していたことに気づいたんです。最初は不安でしたが、じゃあここも取ってみよう、あそこもなくしてみようと快感が連鎖していった感じですね。地面についても、道のアスファルトを一部切って土を露出させてみると、「道に庭が混ざっている」という感覚になって、公私の境界線がぼかされていく。

Fujino Takashi

アスファルトに
切れ込みを入れた向こう側から
堰き止めていたエネルギーが噴き出している。

道を「庭に読み替える」作業といいますか、公共性を帯びながら私有するデザインといえるのではないかと思います。

藤野　アスファルト舗装を切るとか、壁を取り除くというのは、たとえばすでに鉛筆で書かれている絵の上から、消しゴムで消しながら新しい絵を描くようなデザイン手法ですね。でもここで起きていることは、切れ込みの向こう側から堰き止めていたエネルギーが噴き出してくる感覚です。塀の消去によっても、他者の視線や行動といった制御できない事柄が向こうからあふれ出してくる。街の真ん中で、自らの制御の外にある他者に対してこれだけ寛容な姿勢があるからこそ、まるで自然環境のなかにいるような自由な感覚を得られるのだと思います。

須藤　そういえば、「ニシイケバレイ」を設計するにあたって、「野生」という言葉をよく使っていましたね。「制御されていないもの」が都市のなかにあること自体が価値で、それをどうすれば居ながらにして感じることができるかをつねに考えていました。

ありつづける樹木から考えるデザイン

——では藤野高志さんの「林を彫刻する」(34〜41ページ)では、どのような考え方で計画を進めていかれたのでしょうか。

藤野　敷地は前橋市の利根川の土手沿いで、かつて前橋の奥座敷として栄えた料亭の庭の跡地です。今でも大きな石や樹木がたくさん残っています。この樹木の根っこが堤防を維持するために寄与していたこともあり、長いあいだ大切にされ巨樹に成長している、そんな重層的な歴史をもった敷地です。敷地全体のオーナーの小見純一さんは1985年にレストランカフェ「リッツ」を建て、93年には絵本屋さんを中心としたギャラリー「フリッツアートセンター」を開館しました。このふたつの建物に隣接して、客席をもたないテイクアウト専門のパン屋を設計することになったわけですが、「リッツ」は四角形のコンクリート打放し、「フリッツアートセンター」は飛行機の格納庫のような土管状の円形の大空間で、この場所に通底する造形は何かと考えたときに、やはり三角形だろうと。○△□の絵本の世界観ですね。すでに敷地の先客としてこの場所に生き続けている樹木の下の、心地よい木陰空間をゆるやかに拡張するかたちで、まずは「敷島のパン屋」で三角屋根の建物を樹木に寄り添うように計画しました（37ページ）。

須藤　「敷島のパン屋」で感じたのですが、藤野さんの建築は、単体なのに面を形成しているように見えますよね。パン屋の軒先に垂木が出ていて、その垂木の上に屋根が葺かれていて、その上は樹木の枝や葉で覆われている。お客さんはいろんなグラデーションで「屋外」を体感するわけですけれど、これはいわば「面を体験する装置」のようなもので、建築なのか自然なのか、「感覚をブラされている」ように感じます。

藤野　そうですね。樹木は面的にはグラデーショナルな存在です。どこからどこまでが木の下、という建築のような明確な輪郭線はもっていない。中心に向けて徐々に密度が上がる空間性を携えているので、面のデザインを考えるときには重要な要素です。今回、樹木をきっかけにエリアをデザインしようと考えたきっかけは、宮沢賢治の『虔十公園林』という童話でした。虔十という名前のいじめられっ子が、あるときから父に頼み込んで自宅の裏庭に杉の苗を植えはじめるんです。最初は周囲に冷笑されるのですが、やがて杉林は子どもたちの格好の遊び場になります。虔十は不幸にも亡くなりますが、時がたち周囲がすっかり変貌するなかで杉林は残り、村の人びとは虔十が伝えたかったことに気づく。小見さんに紹介されたこの童話は、この敷地を前にした私にとってとても響くものでした。

須藤　一般的に不動産は築年数が増えれば増えるほど価値は下がります。でも緑は年数がたてばたつほど成長して、価値が上がっていく。木々が育つように不動産が育っていく、ということができないか、という感覚は私にもあります。

藤野　建築も、ある年齢を重ねると樹木みたいになる感じがしませんか。法隆寺は、あれだけ古いからその古さ自体に価値を感じることができる。今、丹下健三設計の「香川県立体育館」を壊すかどうかという議論がありますが、あと10年間寝かせておけば、価値のほうが勝って壊されなくて済むんじゃないかな。

> 木々が育っていくように成長しながら
> 価値を上げる不動産ができないか、
> という感覚がある。

Sudo Tsuyoshi

面でデザインを統一したくはない

——藤野さんは一方で、小野田泰明さん、髙橋一平さんらと仙台市の街区計画を手がけられていますね。個々の建物の設計はせずに、区画の割り方をデザインされています。

藤野　敷地はこれまで田んぼだった場所で、津波で人が住めなくなった地域の方々の移転のために計画された住宅地です。

ここでは、画一的になりがちな住宅地に自然発生的な多様性を生むための「ルール」をつくったんです。既存の住宅地のような四角い区割りの場合、日当たりと接道条件を考慮すると、だいたい同じ住宅配置に収斂されてしまいます。つまり敷地の区割り形状が住宅地のあり方を事実上規定してしまうんです。そこで区割りをジグソーパズルみたいに有機的な曲線で分割し、ある敷地は東側に大きくセットバックが取れたり、敷地が隣接する部分が大きな共有庭のように見えてきたり、といった抑揚を住宅地のなかに生み出しました。区割りの仕組みから「面をデザインする」のです。

——もし街区計画だけでなく、建築の設計も依頼されていたとしたら、どのように考えられましたか。

藤野　可能なら住宅地を一気に設計せずに、なるべく時間差をもって設計したいですね。人は建築に暮らすと同時に、もっと広いまわりの環境のなかに暮らしているわけで、となりの敷地で起きていることは、敷地内をデザインするときの非常に重要な要素となる。つまりある群像を時間差をもってデザインするということは、自分の過去の設計や、すでに暮らしはじめている周囲のあり方から影響されることを意味します。過去の自分自身も含めて多くの他者が設計条件に介在することで、オープンエンドなデザインをまとえる気がします。土木の範疇と考えられている道路や宅地の区割り、設計プロセスの工夫などで、画一的になりがちな住宅地においても、まだまだ風景の多様さを生み出すことができると思います。

——統一的なデザインを一度に決めてしまいたくないということでしょうか。

Fujino Takashi

「面のデザイン」には時間的なシークエンスが重要。時間の流れのなかで、その都度、最適解が導き出される。

藤野　そうです。「敷島のパン屋」が立つ一帯の敷地も、将来的には敷地の樹木の合間に、小さな店舗兼住宅を点在させていきますが、今からデザインの細部まで決めたくない。「面でデザイン」するにあたって、時間的なシークエンスが非常に重要になってきます。一軒できれば、周囲に必ず連関してくるわけですから、たとえ最初に完成予想図があったとしても、最初に描いた全体計画のままでいいとは、なかなか思えないはずですし、それがそのまま建ってしまったらある種の思考停止です。時間を経るなかで、設計者である自分も少しずつ歳をとり経験を積むので、大事にしていることが変化していく。オーナーさんも変化していく。時間の流れのなかで、その都度の判断で最適解が導き出される。そういう連歌形式の創造は、悪いこととは受け止めておらず、むしろ可能性だと思っています。

——おふたりとも、街区のデザインを統一することには少し抵抗があるように感じるのですが、その心理はどこから来るのでしょうか。

須藤　近代建築のあり方を振り返ると、細部まで専門家が決めすぎることで、使う側の能動性が失われているのではないかという危惧を感じます。建築は「かかわりしろ」が多い毛深いもののほうがいいんです。つくり手がユーザーとしてかかわり、使い手からつくり手が学ぶ、という感覚で、どちらが表か裏かよくわからない襞（ひだ）状の関係のほうがいいんじゃないかと。

藤野　統一的なデザインといえば、団地が真っ先に思い浮かびます。当時の社会は終身雇用制があたりまえで、たとえば一部上場の大企業の社員家族寮に入っているということがステイタスでした。その時代においては、画一的なデザインの反復に価値を見出せていた。しかし現在、終身雇用もくずれ、組織のなかに留まら

Special Feature Large-Area Design by Architects

Discussion

藤野高志

Fujino Takashi

ふじの・たかし／1975年群馬県生まれ。98年東北大学工学部建築学科卒業。2000年東北大学大学院都市・建築学博士前期課程修了。清水建設本社設計本部、はりゅうウッドスタジオを経て、06年生物建築舎設立。東北大学准教授。おもな作品＝「天神山のアトリエ」（11）、「貝沢の家」（15）、「ケーブルカー」（20）。

ない働き方も多いなかで、画一的なデザインは時代遅れだと考える人が増えた。社会の価値観とデザインは表裏一体です。

須藤「制服を着せて全体感を出す」よりも、好きな服装で「個性を伸ばす」ほうがよいでしょうし、自立心が芽生えるように思います。とはいうものの、新規で「面をデザインする」にあたって、街並みをあえて異質なものにするのもどうかと思います。

藤野　同時につくっているのに、あえて構造や仕様を変えるのは、それはそれで恣意性を感じますし、「多様性のための多様さ」という、ある種の非合理が生まれてしまいます。

植物で大地とつながる

須藤　街並みがあまりにも統一されすぎていることに違和感を感じるのは、そもそも街並みには時間が内包されていることが重要だからです。これはなかなか難しい問題ですけれど、ひとつの手法として、植物を媒介させるのは効果的なのかもしれません。たとえば「ニシイケバレイ」では、深野さんの感覚を取り入れながら植栽を決めていますが、そこに新たに樹が1本植えられることで、そこを通る保育園児たちの散歩の風景が変わるわけで、それに反応する園児たちの様子も変化します。設計者が特段何かを用意しなくても、自然は毎日毎日、見た目の変化を与えてくれるじゃないですか。香りもあるし、食べられるものもある。植物のなかにはあらかじめ四季が実装されているんです。面がつねに変化しつづけて、時間を内包するために、自然は本当に大切ですね。

藤野　そうですね。あと、植物は「人がかかわっている」ということを感知させてくれる面もあります。剪定されたり掃き掃除されたりと、人間が世話をした痕跡を植物は伝えてくれます。私は植物があることで、地面の下を感じるといいますか、すでに面ではなく土壌という厚みをもったボリュームが静かに存在しているという感覚があります。植物が自由に上空に枝葉を伸ばす姿は、地面の下のエネルギーが縦横無尽に「噴き出したもの」のように感じます。

須藤「ニシイケバレイ」の「バレイ」は谷という意味ですが、これは単に高層ビルに挟まれた形態を指しているだけではない気がします。谷って、山から流れてきた養分や川の水があつまるじゃないですか。もしかしたら「ニシイケバレイ」を支えているのは、その脇に立っている高層ビルに住んでいる住人なのかもしれません。おもしろい人たちが山の上に住んでいて、支流が谷間で出合うように、おもしろい場が生まれる。「ニシイケバレイ」にはそういう生態系が生まれているように思います。

藤野「ニシイケバレイ」という地勢的なネーミングが魅力的ですよね。そして何より、オーナーの深野さんがつい最近まで築70年の木造平屋に住んでいて、地面に近いところに暮らすリアルな価値を身体を介して理解してくださっているということが、このバレイを成立させているように思います。

須藤　敷島のオーナーの小見さんも、自分がよいと思う本やアーティストを紹介されたり、今すぐに出る成果ではなく、未来にこの場所をつないでいくという感じが強くて、深野さんと共通する感覚のように思いました。想いで街が変わる、その面積は小さいかもしれないけれど、そういう想いに寄り添って、設計者としてコミットしていきたいなと思いますね。

自然は毎日見た目の変化を与えてくれる。
植物のなかにはあらかじめ
四季（時間）が内包されている。

Sudo Tsuyoshi

須藤 剛
Sudo Tsuyoshi
すどう・つよし／1980年埼玉県生まれ。2003年法政大学工学部土木工学科卒業。北川原温建築都市研究所、ジャムズを経て、12年須藤剛建築設計事務所設立。おもな作品＝「狛江の住宅」（18）、「神田ポートビル」（21）、「おおたかの森の住宅」（22）。

池袋のビルの谷に残された
趣も大きさもバラバラな3つの建築。
須藤剛さんはそれらをひとつずつ
段階的にリノベーションしていくことで、
つながりのある、調和した環境を
つくり出した。

取材・文／杉前政樹　写真／桑田瑞穂

Nishiike Valley

作品	ニシイケバレイ
設計	須藤　剛

ph.no. 1

「ニシイケバレイ」全景。木造平屋、RC造集合住宅、賃貸アパートなど、多様な建物が互いに距離をとりながら並び立つ。

Special Feature
Large-
Area
Design
by
Architects

Case Study

01

ビルの谷にコミュニティをつくる

池袋駅西口を出て要町通りを西へ数分歩き、脇道に1本入ると、大通りの喧騒が一気に静まり、ビルの谷間に1軒の木造平屋が見えてくる。うっそうと茂る庭木に屋根付きの立派な門。その前に、開店を待つ十数人の女性の行列ができていた。学生や若い社会人から赤ちゃん連れ、40〜50代のグループまで、スマホを片手にいろんなポーズで「映えるカフェ」を撮影している。

ここは築70年の民家を改装した「チャノマ」。抹茶ラテと濃厚抹茶テリーヌが人気の「古民家カフェ」だ。こんな都会の真ん中で、縁側から庭を眺めながらちゃぶ台でゆるりとなごめる「隠れ家」感が人気を集めているが、庭の奥にまわると築33年のRC造賃貸住宅の一階部分を店舗に改装した「うつわbase FUURO」(コーポ紫雲)、さらにその奥には、築50年アパートを改装した「和酒酔処 わく別誂」「寄り道処 ふう」(ショクタク)へと続く。築年数も構造もバラバラな3つの建築はすべてオーナーの深野家が代々所有してきたもので、これらを改修しながらゆるやかにつなぎ、「ニシイケバレイ」と名付けて「面」としてのデザインを続けているのが建築家の須藤剛さんである。

都市に残された木造平屋で住み開き

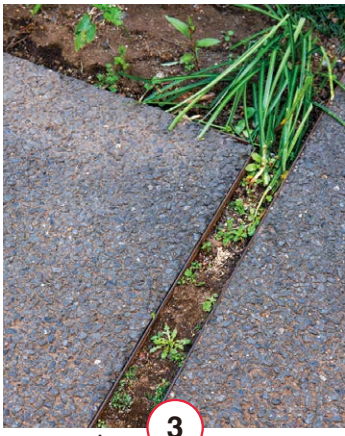
「ここを地域の人びとが気軽に集まれる私設公民館のようにしたい。子どもが学校帰りにランドセルを置いてどこかに遊びに行けるような、というのがオーナーの深野弘之さんのリクエストでした」と須藤さんは振り返る。オーナー家はこの一帯で17代続く大地主。1990年代後半までは木造家屋で三世帯居住していたが、要町通り沿いに14階建て賃貸住宅「MFビル」を建てたときに、高層マンションへの転居を嫌がった祖父のために一部を残して曳家したのが、築70年の木造平屋であった。だが祖父はほどなく介護が必要となり、空き家となっていたところを、2000年頃から深野夫妻が暮らしはじめる。夏は暑く冬は冷え込む木造家屋ではあったが、庭先で有機野菜の販売をしたり、味噌の仕込み会などのイベントをしたり、いわゆる「住み開き」を実践して平屋暮らしをエンジョイしていた。豊島区に住むエキスパートに話を聞く「としま会議」にも参加し、須藤さんとはそこで初めて面識をもったという。

Special Feature Large-Area Design by Architects
Case Study 01
Nishiike Valley

塀を壊し床レベルを揃え、内と外の境界をあいまいにして、1階を街に開く。

ph.no. 2

写真上／アスファルトを一部剝がしレンガに置き換えている。下／アスファルトに入れたスリット。


ph.no. 3

オーナーの個性を開放し人びとが集まる場所へ

「まちづくりの本を読んだり、人に会ったりしているうちに、大家の個性が爆発しているほうがおもしろいものができるような気がして、1階を街に開こうと思ったんです」と深野さんはいう。そこで須藤さんはまず敷地を取り囲むコンクリート壁をすべて壊して、文字どおりに庭を街に開放した。土間の床レベルや仕上げを外部と連続させて、アプローチを大型の木製框戸の引き戸にして敷地内の空地をつなぎながら、内と外の境界をあいまいにし、さらには大胆にもアスファルト舗装に切り込みを入れて、スリットから植物が生い茂る小径をつくりあげた。

こうして2020年7月にオープンしたのだが、当初はキッチン+土間スペース+和室6畳の部分に飲食店が入居して運営し、奥の10畳間は直営のレンタルスペースとして分離していた。しかし、コロナ禍とあって店は開店休業状態が続き、やがて閉店。そこでオーナーは2021年12月にカフェ「チャノマ」を直営でオープンし、現在は冒頭で触れたように、行列ができるほどの人気店になっている。

次に手がけたのが、築50年の木造アパート「白百合荘」の改装。全9戸のいわゆる風呂なし木賃アパートだが、入居者の高齢化もあって新規募集をやめ、全戸が空いたのを見計らって、地元で評判の和食店の2号店を誘致した。約80㎡の1階は手前と奥で店の名前を分けて、奥はゆったりしたカウンター席の割烹に、手前は気楽に立ち寄れる酒処がコンセプトである。同業者は、コロナ禍にこんな人どおりのない場所でオープンするなど「ありえない」とあきれた

ph.no. 4

築70年の木造平屋を改修したカフェ「チャノマ」。塀を撤去、入口を土間とし、私道から建物内部までを連続させた。

ph.no. 5

左から道、植栽とパーゴラ、縁側、建物となるように、道から建物までの境界がレイヤー状にデザインされている。

ph.no. 6

「チャノマ」の和室からパーゴラ越しに道を見る。室内と道をつなげつつ、緑のスクリーンが緩衝帯として機能する。

そうだが、プロの予想をくつがえして、今では昼も夜も大繁盛している。

2階はコワーキングスペースとシェアキッチンからなる「アティック」。いつか実店舗を構えたい人たちが店を出せる場を提供している。深野さんが、「経年している建物だからこそのおもしろさ、かかわりやすさがあるのではないか」と言うように、チーズケーキやレーズンサンドなど、日替わりでさまざまな店舗が営業して人気を博している。

そしてふたつの建物に挟まれたRC造の賃貸住宅「コーポ紫雲」もまた、退去者が出た部屋からリニューアルが進行中である。1階の角部屋はすでにうつわを売る店舗に改修されているが、1階の残り3戸も空き次第、路面店に変えていく予定で、上階の部屋は土間部分がSOHOにできるような仕様にリフォームされていく。すでに近隣にある立教大学関係者や、プロジェクションマッピングやソーラー・シェアリングの会社などがテナントに入っており、今後も「ニシイケバレイ」に魅力を感じた人や企業が集まっていくことをめざしている。

「チャノマ」内観。手前の土間には入口と椅子座の客席、奥の一段上がった和室は床座の客席としている。

ph.no. 7

街の魅力が人を集め価値を高める

では実際のところ、こうした「面的なまちづくり」はどのようなメリットをもたらしているのだろうか。「コーポ紫雲」はもともと42〜46㎡で家賃11万円。これをSOHO付きにフルリフォームした部屋は16万円にアップしている。おもしろいことに、一般的な修繕やリフォーム程度しかしない「MFビル」も、「ニシイケバレイ」のSNSを通じて空室募集を出せば入居者が見つかるようになってきた。70㎡弱で管理費込み21万5000円と、池袋駅至近の立地としてはお値頃なこともあるが、やはり「ニシイケバレイ」全体としての魅力が経済的価値を高めていることの表れであろう。

「この場所に対してフレンドリーな感覚の方が来てくれるほど、入居者の人柄もよくわかるようになりますし、ゴミ出しや騒音のトラブルも減り、時々やっている花火やパルクールのイベントに対しても寛容になってくれると思うんですよ」と深野さんはいう。入居者一人ひとりが地域に興味と関心をもつことが、結局のところ街をよくし

ph.no. 8

左に「コーポ紫雲」、右に「ショクタク／アティック」。1階に居酒屋。パーゴラに囲われたあいだの通路を進むと小さな菜園がある。

ていくという確信が、このような息の長いプロジェクトを続ける原動力となっているのであろう。

新築計画でさらに広がるオーナーの夢

集合住宅を改修した「コーポ紫雲」。101号室には「うつわbase FUURO」が入る。バルコニーの手すり壁を解体し店の入口とした。

ph.no. 9

3軒の改修プロジェクトを経て、昨年からいよいよ新築計画が動き出している。「チャノマ」の東側、貸駐車場となっている敷地に、RC造3階建ての集合住宅をつくる。延床面積は約800㎡。建物は4つに分けられていて、南北方向にのびる幅約2mの隙間が裏路地のように歩行者を誘う。1階は店舗で、2階以上は小商いにも使える余白のスペースが付いた住居となる。

「4つの建物は、日照や通風、窓からの視線といった諸条件において、お互いがお互いを〝思いやっている〟関係になるように設計しています」と須藤さんはいう。外壁仕上げは打放しとする予定だという。エリアのなかのどれかの建物に寄せたり、意図的に差異をつくることはせずに、それぞれの合理性でつくられてきたバラバラな建物がつながっている「ニシイケバレイ」の特徴をそのまま継いで、外壁の違いはむしろ「らしさ」ととらえようということのようである。

新棟が完成したら屋上では養蜂を計画中のほか、ソーラーパネルを設置してEV自動車につなげて充電、その車に乗って近郊の土地で有機野菜農場を始めて……とオーナー深野さんの夢は広がっていく。通常建築家は、クライアントの夢を建築空間で叶える職能とみなされているが、ここで起きていることは少し違うのかもしれない。須藤さんがつくる建築空間そのものが深野さんに次の夢を与えているのではないか。そんな幸せな関係の連鎖が、「ニシイケバレイ」をより豊潤な渓谷にしているように思える。

Special Feature Large-Area Design by Architects

Case Study 01

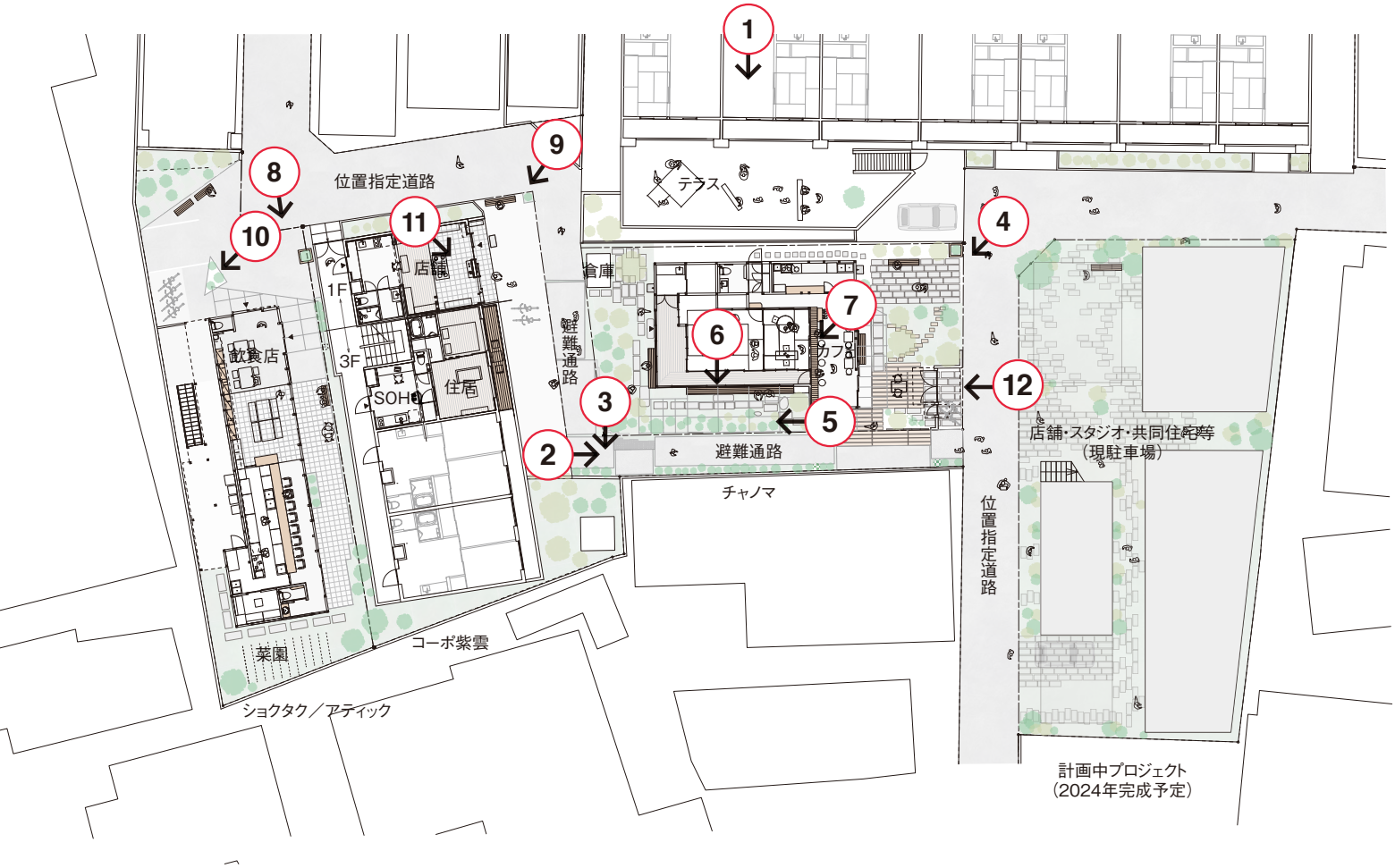
Nishiike Valley

平面図

N

0 2 4m

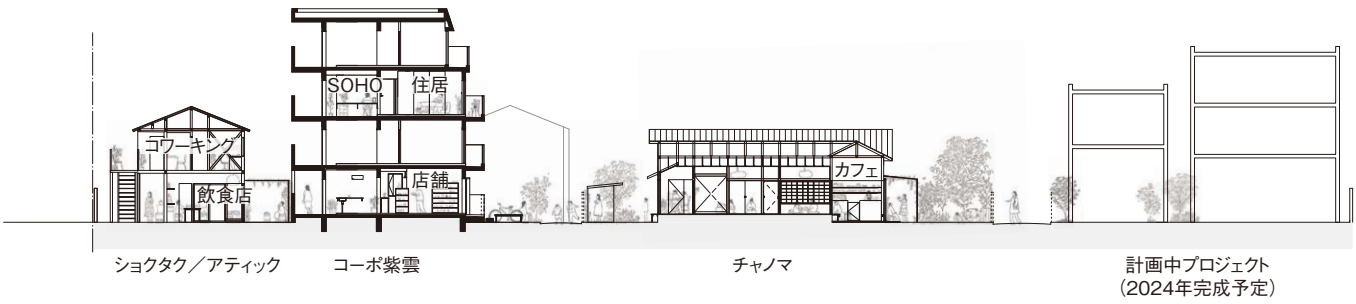
1/400



断面図

0 2 4m

1/400



ph.no. 12

「チャノマ」入口の門。

ニシイケバレイ

建築概要	
「チャノマ」	
「コーポ紫雲」(*)	
「ショクタク／アティック」(**)	
所在地	東京都豊島区
主要用途	飲食店／店舗併用住宅*／ 飲食店、レンタルスペース**
設計	須藤剛建築設計事務所
構造設計	yasuhirokaneda STRUCTURE (パーゴラのみ)
施工	日神山内装／ AGAIN総合リフォーム*／ 日神山内装**
階数	地上1階／地上4階*／地上2階**
敷地面積	258.91㎡／321.81㎡*／279.88㎡**
建築面積	89.85㎡／180.36㎡*／114.96㎡**
延床面積	89.85㎡／534.435㎡*／165.21㎡**
設計期間	2019年11月～2020年2月／ 2020年11月～12月*／ 2020年1月～2021年1月**
工事期間	2020年3月～6月／ 2021年1月～2月*／ 2021年1月～5月**
おもな外部仕上げ	
壁	ラスモルタル アクリルリシン吹付け
開口部	木製建具
外構	枕木、御影石(移設)、 天然石洗い出し
おもな外部仕上げ*	
開口部	木製建具
壁	タイル貼り
外構	一部モルタル金ごて ケイ酸塩素系コンクリート表面強化材
おもな外部仕上げ**	
屋根・外壁	既存ままま
開口部	一部木製建具、アルミサッシ
外構	アスファルト、コンクリート平板

Sudo Tsuyoshi
須藤 剛

すどう・つよし／ 1980年埼玉県生まれ。2003年法政大学工学部土木工学科卒業。北川原温建築都市研究所、ジャムズを経て、12年須藤剛建築設計事務所設立。おもな作品=「狛江の住宅」(18)、「神田ポートビル」(21)、「おおたかの森の住宅」(22)。

提供／須藤剛建築設計事務所

ph.no. 10

「ショクタク／アティック」前。アスファルトに三角形の切り込みを入れて土を露出させ、植物を植えた。

ph.no. 11

「うつわbase FUURO」内観。「チャノマ」方向に大きく開く。

「ショクタク／アティック」
２階のシェアキッチン。

ニシイケバレイの
動画を
ご覧いただけます
Check!

小田急線の地下化により生じた
下北沢の線路跡地。
ツバメアーキテクツがそこにデザインしたのは、
若者が暮らしながら商いができる、
小さな店舗付き住宅群だった。

取材・文／大井隆弘　写真／藤塚光政

BONUS TRACK

作品	BONUS TRACK
設計	山道拓人＋千葉元生＋西川日満里

街に溶け込む線路跡地の商店街

Special Feature
Large-
Area
Design
by
Architects

Case Study

02

ph.no. 1

下北沢の住宅地になじむBONUS TRACK。店舗兼用住宅が入るSOHO棟と、シェアオフィスなどが入る中央棟からなる。

写真番号（ph.no.）は、p.25のアイソメトリックに記載された番号に対応しています。

あることのために要する部分を「しろ」という。たとえば、紙を貼り合わせるために「のりしろ」があり、本をとじるために「とじしろ」がある。最近では、地域再生などの現場で「かかわりしろ」という造語も聞くが、人と建物、建物と街をつなげる「しろ」とはいったいどんなものか。どのようなデザインがありえるのか。ツバメアーキテクツが設計し、2020年にオープンした「BONUS TRACK」は、そうした建物がもつ「しろ」を考える好例である。

個人や若手を応援する新しい商店街をつくる

「BONUS TRACK」は、小田急電鉄が手がける「下北線路街」に立つ施設のひとつである。「下北線路街」とは、東京都の「連続立体交差事業」、小田急電鉄の「複々線化事業」の一環として、東北沢駅から世田谷代田駅までの約1・7㎞の区間が地下化されたことに伴い生まれた線路跡地の再開発プロジェクトである。全部で13のエリアに分かれ、ホテルや温泉旅館、カフェなどの商業施設、保育園などの教育施設が立ち並ぶ。プロジェクトにあたって小田急電鉄が掲げたテーマは「支援型開発」と呼ばれるもので、新しい施設やサービスを一方的に提供するのではなく、地域のプレーヤーを主役にすえ、小田急電鉄がサポートを行うというものだった。そもそも鉄道会社の収益は乗客輸送量に左右される。乗客を増やすためには駅や街のイメージアップ、地域住民との良好な関係構築が欠かせない。下北沢は、まちづくり意識の高い住民も多い地域だが、鉄道会社であれば路線全体でバランスをとり、地域特性にあった事業展開も可能だ。「支援型開発」というテーマには、こうした背景があり、なかでも「BONUS TRACK」は、それを最も体現する施設のひとつと位置づけられた。

企画段階からプロジェクトにかかわり、建物の設計を手がけたのは、ツバメアーキテクツ。山道拓人さん、千葉元生さん、西川日満里さんの3名が主宰する設計事務所で、建物の設計以外に、企画立案や完成後の使用方法を検討するラボ部門をもち、ユーザーが建物に手を加えられるような設計や、地域住民を対象としたワークショップの経験を有していた。「下北沢の街には人間らしいスケール感があり、個性豊かなお店が多くあります。演劇や音楽、古着などの文化も根付き若者も多い。『BONUS TRACK』の敷地は、ちょうど駅と駅の中間にあり、住宅街への配慮も必要な場所でしたが、商業エリアから続く下北沢らしさを引き継ぎつつ、どのような開発ができるのか。そんな相談を最初はラボ部門で受けました。小田急さんなどとも議論を重ね、最終的には個人や若者のチャレンジを応援する場としてSOHOをつくることが決まりました」と山道さん。住みながら店舗を開く。規模は小さいが、そのぶんぐっと賃料を抑えて、個人や若手が入居しやすい4棟10戸のSOHOと、下北沢で長年続く店舗を含む4つのテナントが入居し、トイレやシェアオフィスなど、SOHO棟のサポートも行う中央棟を建設する計画がまとまった。

ルールを決めて変化を許容し、
入居者たちが
自ら育てていく店舗や施設に。

1階店舗のファサード。店がまえをつくる庇は下地の鉄骨までを設計し、仕上げや暖簾は入居者が自ら設置。

左にSOHO棟、右に中央棟、奥に広場を見る。サイディングの外壁にはサインを取り付けるなど、入居者が手を入れることができる。

改変しやすいデザイン意欲を掻き立てるルール

敷地は、第一種中高層住居専用地域と第一種低層住居専用地域にまたがっており、建物の用途、規模、配置は、当然ながらこの用途地域と関係している。つまり、2階建てで500㎡以下の店舗が建設できる第一種中高層住居専用地域に中央棟が、店舗や事務所部分が50㎡以下で延床面積の半分以下の兼用住宅が建設できる第一種低層住居専用地域にSOHO棟が配置されている。また、用途地域とは別に、地面の下には鉄道が走るので、万が一の際に除却が容易な規模や構造が選択された。

配置の次は、ボリュームや材料。5棟はいずれも単調な四角形にはせず、周囲の住居スケールを意識してボリュームを分割している。外壁は入隅の2面を同じ材料にし、広場などの輪郭を強調するよう工夫されているが、材料自体は住宅でおなじみのサイディングやジョリパット、鋼板スパンドレルを採用。ほとんどの窓も引違いのアルミサッシとした。また、屋根は各ボリュームで方向が異なる片流れとし、軒裏は木部を露出させている。垂木が途中で止まっていることもあり、やや未完成な印象も与えているようだ。千葉さんは「入居者自ら店舗や施設を育てていってほしいという想いがあり、建物に手を入れやすい雰囲気を考えました。多くの店舗の内装で軸組を現しにしたのも同じ理由です。入居者向けの『内

ph.no. 4

建物に囲われた広場。それぞれの店舗が外部に席を出すことで、多様なにぎわいが生まれている。

ph.no. 5

中央棟外観。木造２階建てのボリュームに分節された片流れの屋根がのる。

装監理指針書』も自分たちでつくりましたが、禁止型ではなく許可型の記述を大切にし、改変する意欲を掻き立てるルールを心がけました。ルールを決めて変化を許容することが大切ですね」という。もちろん構造自体に手を加えることはできないが、各戸の基礎のはね出し部分や、サイディングの外壁、出入口の庇部分は、入居者が手を加えてよいルールになっている。住宅街から引き継いだボリュームや材料、意図的に未完成な雰囲気や許可型のルールが、建物と街、入居者をつなぐ「しろ」となっているようだ。

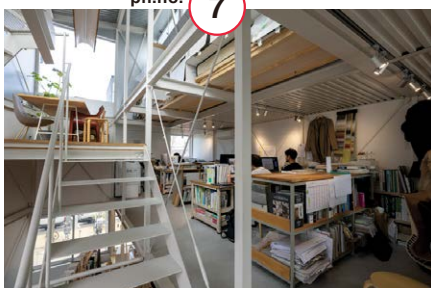
手すりを居場所に変える

こうして生まれた屋内外の空間に、小田原から運んできたという多くの植物が潤いを与える。「敷地は5つに区画されていますが、区の通路も含めて一体的な空間になるよう、設計の早い段階から打ち合わせを重ねました。床材の統一はもちろん、境界をまたぐように植栽を計画しています。広場などには各店舗から看板や屋台などがはみ出していますが、店舗間を植栽でゆるやかに区分して、個性を広場に反映しやすい環境づくりに努めました」と西川さん。

ただ、それでも目に見えて残ってしまう境界がある。たとえば、敷地全体でみると下北沢駅側から世田谷代田駅側にかけて、高低差が約4mあるため、区の通路と敷地を分ける位置に手すりが必要になった。「境界をつくる要素を生かすためには、居場所化するという手もあります。手すりであれば、当然その機能は維持しつつも、上部に笠木を付けて小さなテーブルとしても使えるよう計画しました。お客さんが買った飲み物を置くのは想定していましたが、古本市の本棚にしたり、タブレットを置いてオンライン会議をしたりしているのは驚きましたね(笑)」と西川さんは話す。敷地全体の一体化に加え、入居者がその個性を反映しやすい植栽や、境界をつくる要素を積極的に居場所化する設え。こうした工夫も、建物と入居者、さらに利用者とをつなげる「しろ」を生み出している。

ph.no. 6

ツバメアーキテクツの事務所が入居する「HORA BUILDING」。「BONUS TRACK」の東にある。



ph.no. 7

「HORA BUILDING」2階のツバメアーキテクツの事務所。鉄骨で組まれたスキップフロアの空間。

ph.no. 8

「HORA BUILDING」の半地下には、ツバメアーキテクツが自ら運営するドーナツ店が入る。

面の計画を仕掛ける「地域の伴走者」

「BONUS TRACK」のオープン後も企画提案は続き、2022年には鉄道脇のいわゆるヘタ地を有効活用した、3つの企画がツバメアーキテクツの設計で実現した。「下北線路街」一帯の植物のメンテナンスを行う一般社団法人の拠点施設(シモキタ園藝部 こや)、アートギャラリーや地域の祭りの神輿などを保管する倉庫(SRRP-rojectSpace)、さらに半地下を店舗、1、2階をSOHOとした「HORA BUILDING」だ。「HORA BUILDING」には、ツバメアーキテクツの事務所が入居することになり、「下北線路街」や周辺地域との継続的なかかわりを意図してドーナツ店の運営も始めた。「世田谷区は、じつは空き家がとても多く5万戸以上あるといわれています。今回の敷地は、いずれも線路街と地域を結びつける位置にあり、たとえば『HORA BUILDING』では表裏がなく通り抜けができる設計を心がけました。こうした場所が仕掛けとなって、SOHOとしての空き家活用が地域に広がっていけばと考えています」と山道さん。ツバメアーキテクツは入居したばかりだが、今後イベントなどの企画をとおし、「地域の伴走者」としての新しい設計事務所のあり方を模索していきたいという。

「BONUS TRACK」の事業主体は小田急電鉄だが、下北沢ともなじみのある散歩社という会社がマスターリースを受け、入居者とも連携して運営を行っている。SOHOへの入居は、スタートアップとして3年ごとの契約更新で、つど面接をする体制をとっている。最近募集した店舗の入居倍率はなんと60倍にもなった。多くの個人や若者が、「BONUS TRACK」をとおしてみる自身や店舗の将来に「伸びしろ」を感じるのだと思う。

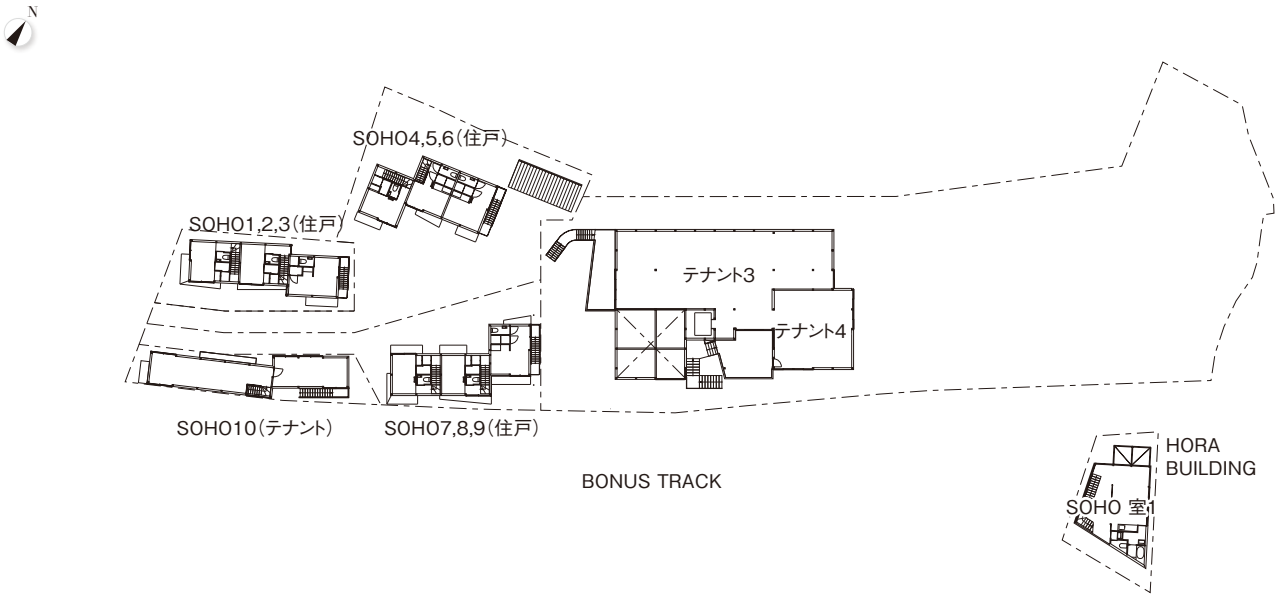
ph.no. 9

下北沢駅から「区立シモキタ雨庭広場」越しに「BONUS TRACK」を見る。

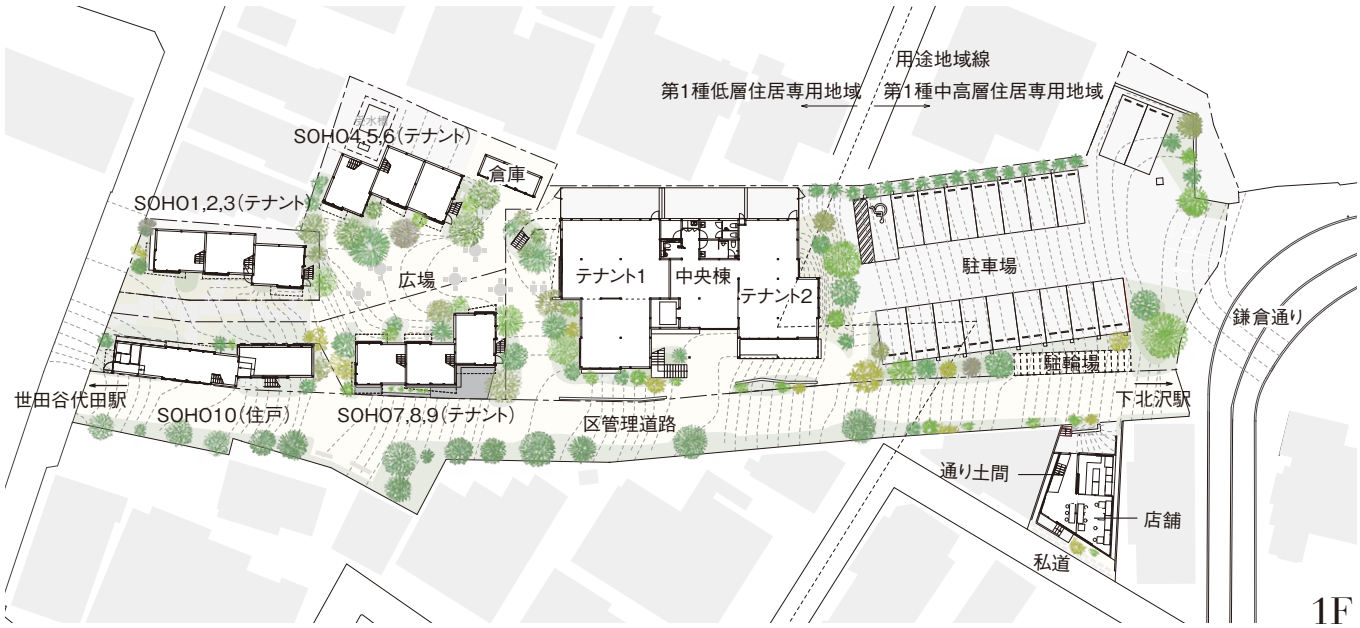
平面図

0 5 10m

1/700



2F

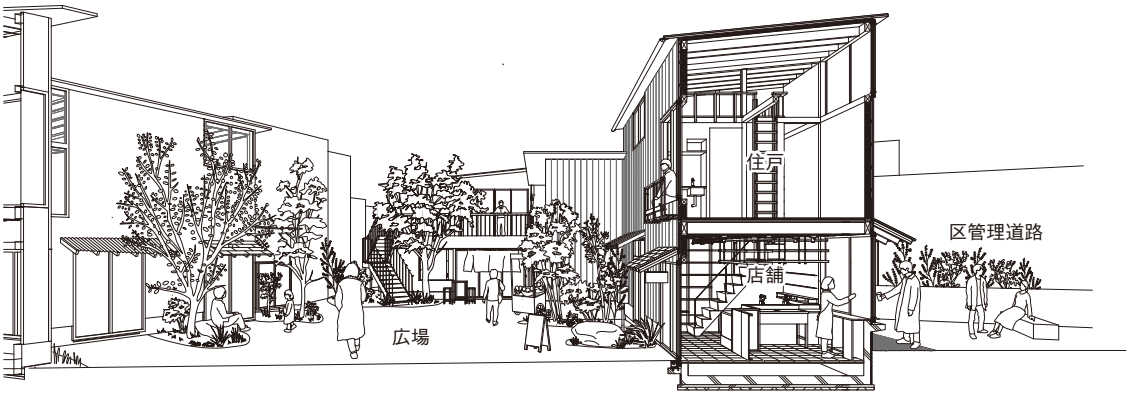


1F

断面図

0 1 2m

1/150



ph.no. 11

「BONUS TRACK」外観。

BONUS TRACK

建築概要	
「BONUS TRACK」	
「HORA BUILDING」(*)	
所在地	東京都世田谷区
主要用途	商業施設、兼用住宅／店舗、兼用住宅*
設計	ツバメアーキテクツ
構造設計	オーノJAPAN
構造	木造／鉄骨造*
施工	山菱工務店
階数	地上2階／地下1階、地上2階*
敷地面積	2,093.35㎡／80.50㎡*
建築面積	503.65㎡／51.62㎡*
延床面積	907.39㎡／135.78㎡*
設計期間	2018年2月〜2019年3月／2020年6月〜2021年9月*
工事期間	2019年4月〜2020年3月／2021年10月〜2022年8月*
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板
壁	ガルバリウム鋼板、窯業系サイディング、スパンドレル、アクリル系仕上げ塗材
開口部	アルミサッシ
外構	透水性脱色アスファルト舗装、ピンコロ石仕上げ、コンクリート平板、マルチング、芝生、地被
おもな外部仕上げ*	
屋根	ガルバリウム鋼板
壁	窯業系サイディング、ガルバリウム鋼板
開口部	アルミサッシ
外構	透水性コンクリート

ツバメアーキテクツのおもな作品=「ツルガソネ保育所・特養通り抜けプロジェクト」(17)、「森の端オフィス」(22)、「六角橋の四軒長屋」(22)。

Sando Takuto
山道拓人

さんどう・たくと／ 1986年東京都生まれ。2009年東京工業大学工学部建築学科卒業。同大学院修士課程を経て、18年同大学院博士課程単位取得満期退学。ELEMENTAL、Tsukuruba Inc. チーフアーキテクトを経て、13年ツバメアーキテクツ設立。法政大学准教授。

Chiba Motoo
千葉元生

ちば・もとお／ 1986年千葉県生まれ。2009年東京工業大学工学部建築学科卒業。10〜11年スイス連邦工科大学（ETH）派遣交換留学。12年東京工業大学大学院建築学専攻修士課程修了。13年ツバメアーキテクツ設立。

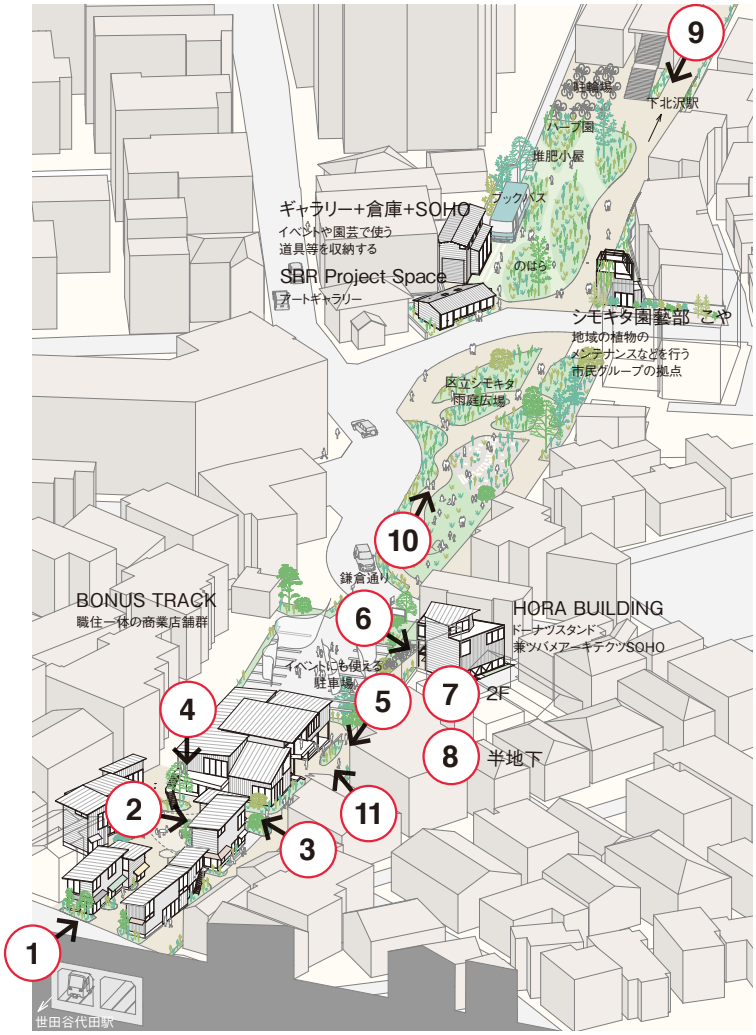
Saikawa Himari
西川日満里

さいかわ・ひまり／1986年新潟県生まれ。2009年お茶の水女子大学生活科学部卒業。10年早稲田大学芸術学校建築設計科修了。12年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA卒業。12〜13年小嶋一浩+赤松佳珠子／ CAt。13年ツバメアーキテクツ設立。

ph.no. 10

「区立シモキタ雨庭広場」から下北沢駅側を見る。左に「SRR Project Space」、右に「シモキタ園藝部 こや」が見える。

アイソメトリック

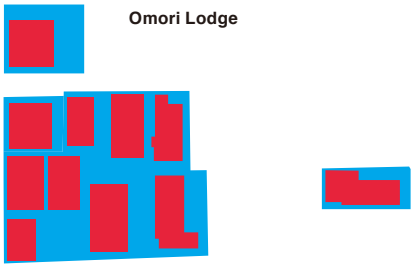


下北沢駅から「BONUS TRACK」までを示した図。小さな建築群と緑の広場で全体が構成されている。

昭和の趣を残して
リノベーションされた「大森ロッヂ」。
そこに2軒の新築と1軒の改修が加わった。
デザインを手がけた古谷俊一さんは
造園家としても活動する建築家だ。
それぞれの建築が
植栽を媒介にして溶け合う。

取材・文／贄川 雪　写真／傍島利浩

Omori Lodge



作品　大森ロッヂ

設計　古谷俊一

新築もリノベも、緑がつなぐ

Special Feature
Large-
Area
Design
by
Architects

Case Study

03

＊1：2008年の開始時点では中央の木造住宅群を指して「大森ロッヂ」と呼んでいたが、現在では新しく加わった3軒を含むエリア全体の呼称にもなっている。

ph.no. 1

「インターバルハウス」3階バルコニーから「運ぶ家」、「大森ロッヂ」を見る。バルコニーにはたくさんの植物が置かれている。

写真番号（ph.no.）は、p.32の鳥瞰図に記載された番号に対応しています。

東京都大田区。京浜急行大森町駅から徒歩数分の場所に「大森ロッヂ」は位置している。黒い下見板張りの外壁が印象的な木造住宅や、それらをぐるりと囲む大和塀など、ノスタルジックな景観が今も残る賃貸住宅群だ。緑を生かした空間設計を得意とする建築家の古谷俊一さんは、隣接する住宅兼アトリエに住まいながら、設計に加え、植栽の計画やメンテナンス、賃貸企画など多面的に「大森ロッヂ」にかかわりつづけてきた。

植物が結んだ縁

「大森ロッヂ」のプロジェクト開始は、2008年にさかのぼる。オーナーの矢野夫妻は、従来の賃貸住宅経営のあり方に疑問を感じていた。受け継いだ昭和30〜40年代に建てられたこの木造住宅群を、その趣や空間の価値を残しつつ、現代の暮らしに合わせてアップデートすることを希望し、ブルースタジオおよび元所員の天野美紀さんに改修を依頼した。

現在ではすっかりおなじみのリノベーション賃貸だが、まだこうした事例は非常に少ない時代だったという。

古谷さんと矢野夫妻が出会ったのは、09年だ。植物好き同士すぐに意気投合し、「大森ロッヂ」の植栽デザインを依頼された。「容積や設備と違い、植栽は賃貸事業の収益にほとんど結びつきません。しかしそれでも、植物のある空間に価値を見出し、そこに投資したいという矢野夫妻の考えにシンパシーを感じました」。こうして、現在に至る長い付き合いが始まった。

ph.no. 2

「大森ロッヂ」プロジェクトの発端となった木造住宅群。周囲を囲う大和塀の隙間から植物がのぞく。

緑が緩衝材となって
デザインの違和をやわらげ、
面的に庭化していくことができる。

大森ロッヂの狛犬と門

退去者が出るタイミングでの施工を繰り返し、木造住宅群の改修は11年にいったん完了を迎える。ここまでを「リノベーション期」ととらえれば、その後「大森ロッヂ」は新しいフェーズである「新築期」へと移行する。矢野夫妻は、この頃見直されはじめた〝小商い〟による地域再生に注目し、「大森ロッヂ」を街に開いていくことを意識しはじめたそうだ。

こうして15年、エリアの北の一角に竣工したのが、古谷さんが設計した「運ぶ家」だ。1階が店舗、2、3階が住居となったふたつの住戸が長屋形式で一体となった、職住近接の建物である。矢野夫妻は「この住宅街にお店をつくってやっていけるかは未知数でしたが、建築の魅力、入居した店主たちの魅力があいまって、ロッヂは街に開かれ、地域とのつながりが生まれました」と振り返る。

さらに19年、2棟目の新築「インターバルハウス」が竣工する。「当時、マンションを改修し自宅にするつもりだと矢野さんたちに話したら、お叱りを受けました(笑)」。そして、コインパーキングとして運用されていた「運ぶ家」の東隣の区画に、新しく古谷さんの住宅兼アトリエを建てることを提案された。

「大森ロッヂ」の核であり、強い個性を放つ既存の木造住宅群に対して、「運ぶ家」と「インターバルハウス」の設計はどのようにアプローチしたのだろうか。

「『運ぶ家』は、ロッヂの空間を垂直方向に延伸したイメージ。2階のヴォイドは、住戸から暮らしがあふれ出す、まさに長屋の露地のような空間です」と古谷さんはいう。店舗付き賃貸住宅が採算を合わせ継続していくためにも、「大森ロッヂ」のコンセプトを体現する広告塔のような建築を意図した。デザインについては、ファサードの色彩や木の露出柱などで視覚的な調和は図りつつも、「大森ロッヂ」のイメージにとらわれすぎないよう心がけたという。

「インターバルハウス」については「道を挟んでいるとはいえ、ここをロッヂから切り離すことには違和感をおぼえたし、面的なイメージは捨てるべきではないと判断しました。また、ロッヂと地域の関係に貢献し、建築として公共性を担保すべきだとも考えました」。そこで、地域にとっての庭のような空間をコンセプトに設計を進めた。隣接する「運ぶ家」と平面形状や階高、露出柱や外壁の一部のデザインを揃えたことで、ふたつの新築は一対の「狛犬」のようになり、「大森ロッヂ」を北側に開く入口が形成されたかたちとなった。

そして現在、「大森ロッヂ」はさらなるフェーズへ展開している。22年、エリアからほんの少し離れた南の一角に、新たに一戸建て木造住宅を改修した「笑門(しょうもん)の家」が完成した。既存の下屋の構造を一部残しながら解体し、コンサバトリー(英国発祥のサンルーム)を意識した半屋外のインナーガーデンのような空間を設えた。明るく開かれながら、内外で植物を育む「笑門の家」は、その名のとおり、南側の「門」のような存在となる。

南北の建築によって、「大森ロッヂ」は地域に向けて拡張された。

植栽によって生まれる新旧の調和

そんな新旧の異なるデザインの建築群が同居するこの空間に面的な調和をもたらしているのは、植物たちの存在だ。「大森ロッ

Special Feature Large-Area Design by Architects
Case Study 03
Omori Lodge

ph.no. 3

「インターバルハウス」(左)と「運ぶ家」(右)。平面形状や高さなど、外形を揃えたデザインとなっている。

ph.no. 4

温室フレームで覆われたインナーガーデンを備えた「笑門の家」。右の小径を進むと突き当たりに「大森ロッヂ」。

ギ」では、古谷さんが大切にしている、植物と建築が融合し合う空間づくりが一貫している。

たとえば木造住宅群のエリアには、飾らない路傍の草花や、日本の植生に合った樹木が選定された。地面と建物の境界に下草を植え込んで空間に彩りを添えたり、斑入りのクリスマスローズのような明るさのある植物を植えたりすることで、長屋の趣を生かしながらも、じめじめとさせない工夫がなされている。

「運ぶ家」では、隣接するこのエリアの植生を引き継ぐように計画した。ヒメシャラやジンチョウゲといった庭木が時期をずらしながら花を咲かせ、季節ごとに店舗の表情を変えていく。

古谷さんにとって、インドアグリーンの養生や果樹の生育実験の場でもある「インターバルハウス」には、豊富な種類の植物が植えられた。ミモザやハクモクレンなどは「運ぶ家」と同様に街路を彩り、北側のモッコウバラはぐんぐんと成長して頭上にアーチを形成する。

そして「笑門の家」では、既存のザクロやサザンカ、ヒイラギナンテンなどの樹木はそのままに、足元にユキヤナギやコデマリ、グミなどを植え込んで、外部とインナーガーデンの緑をグラデーションでつないでいる。

ほんの少し植物を植えるだけでも、建物や空間の印象は劇的に変わる。その場所を明るくすがすがしくする、あるいは緑が緩衝材となってデザインの違和をやわらげ、ひいては周辺の景観までもを面的に庭化していくことができる。

Special Feature Large-Area Design by Architects

Case Study 03

Omori Lodge

15年にわたるゆるやかな進化

全体をいっせいに計画することが可能なプロジェクトであれば、コンセプトを一貫し、デザインに統一感をもたせた建築群を展開することは比較的容易だろう。しかし「大森ロッヂ」はそうではない。敷地や時代、状況ごとに、同じエリア内ながらも求められる要件が大きく異なるプロジェクトであった。ここまで約15年にわたった「大森ロッヂ」のゆるやかな進化は、さながら植物の成長のようだ。主幹である木造住宅群を改修することで樹勢を整え、2軒の新築という枝葉をぐんと伸ばした。そして近作の新たなリノベーションは、「大森ロッヂ」という空間やコミュニティの醸成の先に生まれた新たな息吹かもしれない。

最後に、矢野夫妻から興味深い話を聞いた。実家が「大森ロッヂ」の近くにあって、その存在を知っていた方が、家族構成から「大森ロッヂ」には住めないけれど、このコミュニティのそばにいたいと考えて、近くに分譲住宅を購入されたという。「地域に開き、街を元気にしたいと考えてやってきた私たちとしては、とても感動的な出来事でした。その方は現在もイベントや店舗にお越しになり、ゆるやかにつながっておられます」。

矢野夫妻や古谷さん、そして住民たちが長年大切につくってきた「大森ロッヂ」が醸成したコミュニティが、思わぬ広がりを見せている。

ph.no. 5

ph.no. 7

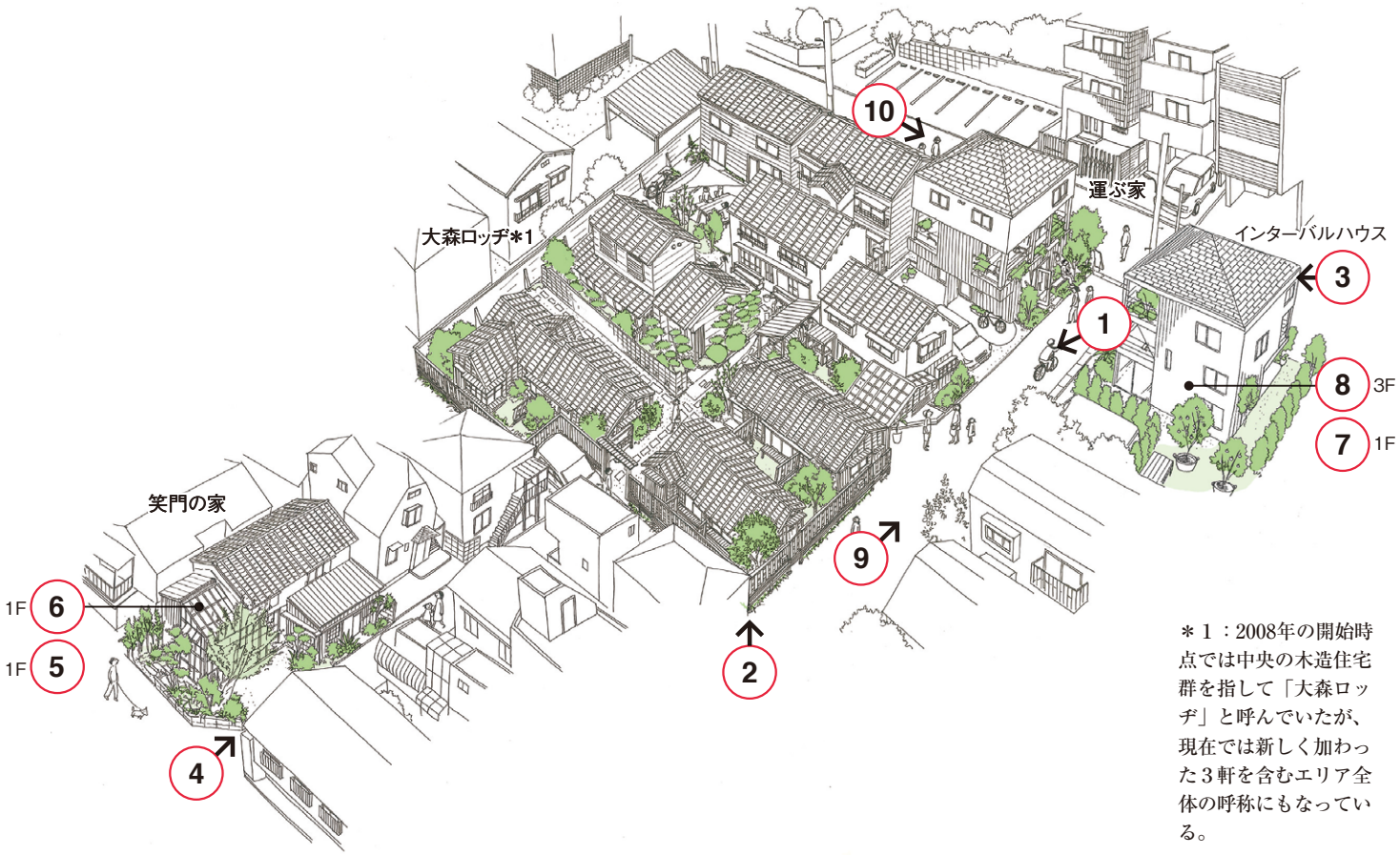
写真右／「笑門の家」。外部と連続した土間空間。
左／木造住宅の下屋を一部解体し温室フレームで囲った。一段上がった和室のミセは仕事場として使用。

ph.no. 6

写真右／ナーセリー（苗木場）を兼ねた「インターバルハウス」1階アトリエの入口。梯子の上は2階玄関。
左／3階リビングダイニング。室内にもたくさんの植物が置かれている。

ph.no. 8

鳥瞰図

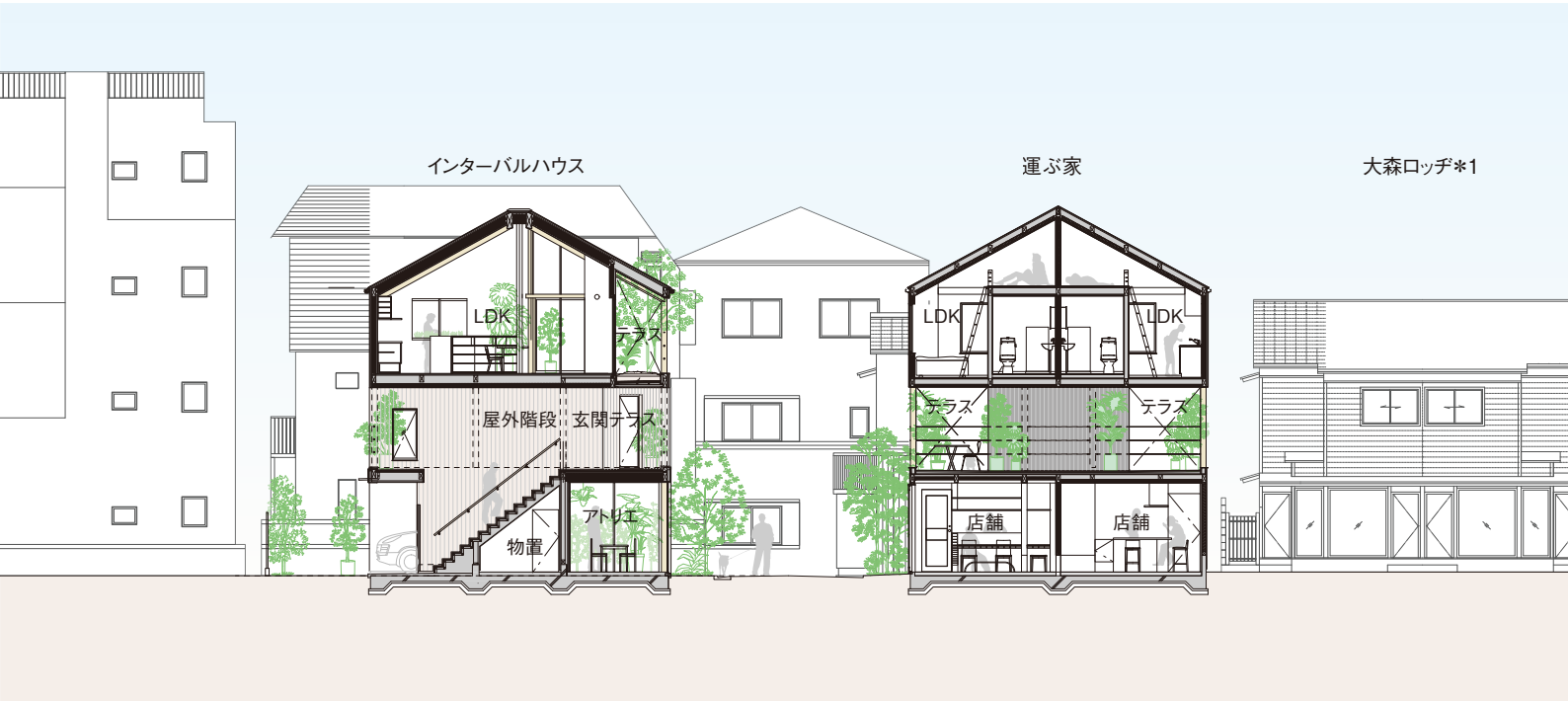


＊1：2008年の開始時点では中央の木造住宅群を指して「大森ロッヂ」と呼んでいたが、現在では新しく加わった3軒を含むエリア全体の呼称にもなっている。

断面図

0 1 2m

1/200



ph.no. 10

「運ぶ家」(手前) と「インターバルハウス」(奥)。

大森ロッヂ

建築概要	
「運ぶ家」	
「インターバルハウス」(*)	
「笑門の家」(**)	
所在地	東京都大田区
主要用途	店舗付き長屋／アトリエ併設住居*／賃貸住宅**
設計	古谷デザイン建築設計事務所
構造設計	KAP
植栽	みどりの空間工作所
構造	木造
施工	トラスト／トラスト*／日起**
階数	地上3階／地上3階*／地上2階**
敷地面積	105.64㎡／168.48㎡*／102.14㎡**
建築面積	56.79㎡／57.36㎡*／60.86㎡**
延床面積	142.88㎡／142.05㎡*／98.12㎡**
設計期間	2014年6月～12月／2017年9月～2018年7月*／2021年3月～6月**
工事期間	2014年12月～2015年6月／2018年7月～2019年1月*／2021年7月～2022年3月**
おもな外部仕上げ	
屋根	アスファルトシングル
壁	窯業系サイディング
開口部	アルミサッシ
外構	砕石敷き、モルタル舗装、植栽
おもな外部仕上げ*	
屋根	アスファルトシングル
壁	モルタルスポンジ押さえ、窯業系サイディング
開口部	アルミサッシ、特注アルミサッシ
外構	砕石敷き、アスファルト舗装、植栽
おもな外部仕上げ**	
屋根	ガルバリウム鋼板 竪はぜ葺き
壁	窯業系サイディング
開口部	温室サッシ、アルミサッシ
外構	砕石敷き、植栽

Furuya Shunichi

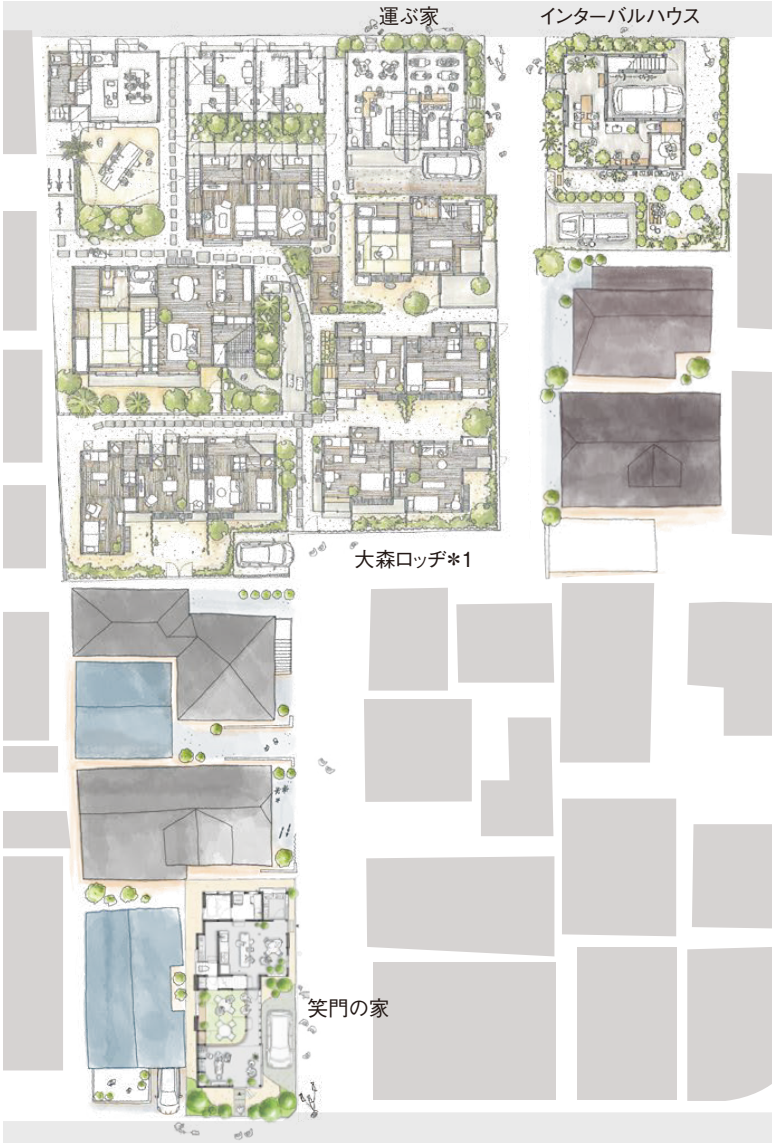
古谷俊一

ふるや・しゅんいち／ 1974年東京都生まれ。97年明治大学理工学部建築学科卒業。2000年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修了。IDÉE、都市デザインシステムを経て、09年古谷デザイン建築設計事務所設立。22年みどりの空間工作所設立。京都芸術大学環境デザイン学科客員教授。おもな作品=「東京クラシック」(16)、「黒龍酒造ESHIKOTOプロジェクト」(22)、「たがやすいえ」(22)。

平面図

0 2 4m

1/500



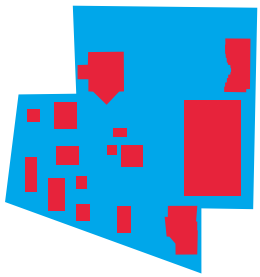
↑北端の入口に「運ぶ家」と「インターバルハウス」が、南端に「笑門の家」が位置する。

ph.no. 9

「インターバルハウス」(右)で育てられた植物たちがほかの建物へ運ばれ、「大森ロッヂ」全体へと広がっていく。

群馬県前橋市の敷島公園のとなり、
樹木が生い茂る敷地がある。
藤野高志さんはそこで、樹木を切らずに、
樹木を避けながら、
樹木とともにある建築群を
構想している。

取材・文／伊藤公文　写真／川辺明伸



Carve the Forest

作品	林を彫刻する
設計	藤野高志

ph.no. 1

全景。左の敷島公園、右の利根川に挟まれた敷地に、緑とともに育つ小さな店舗付き住宅群を分譲していくプロジェクト。

写真番号（ph.no.）は、p.40の配置図に記載された番号に対応しています。

Special Feature
Large-
Area
Design
by
Architects

Case Study

04

樹木を屋根にした建築群

道に面して2本のケヤキが姿よく枝を天に向けている。スダジイが脇に控え、奥には20mを超えていそうなヒマラヤスギの巨木がそびえ、反対側（川側）の道沿いには桜の並木。それらのあいだをビワ、カリン、シュロ、サンショウ、モミジ、イチイ、モミなど種々の樹木が埋めるようにして林が形成されている。高木、低木、常緑、落葉と百木繚乱。そのさまは天然にあらず人工にちがいないが、雑然としていて、なんらかの計画性が働いている様子はない。

市街地の周縁で小さな場所づくりから始めた

その場所はJR前橋駅から北に車で10分ほど、広域で見れば中心市街地からやや離れて周縁をなす位置にある。利根川の左岸、付近は広大な県立敷島公園と閑静な住宅地が広がり、天気のよい日ともなればピクニックやスポーツを楽しむ人で適度なにぎわいがある。そのただなかにエアポケットのようにある広さ2200㎡の土地には前橋の奥の院のような存在の瀟洒な料亭があったが、寂れて廃業となった跡地を現オーナーである小見純一さんの父が一部を購入した。料亭が消え、名残りの樹木群だけがそのままに今に至り、計画性があるともないとも判断しかねる不可思議な林の光景が生まれた。

> 樹木と小屋の双方が、境界などないかのように、
> 相互に距離を測りながら触手を自在に伸ばしあい、
> 絡みあっているかのようだ

1980年代初頭の高度経済成長期にこの場所を引き継いだ小見さんは、一括して分譲あるいは開発に進む誘惑もあったはずだが、それらにはきっぱりと背を向けて、小さな種まきから始めた。大きく構えず、いきなり完成形をめざさず、まずは人が集まる場所づくりから始めようとしたのである。中心市街地をはじめ、どこもかしこもひたすら明るく陰のない快適な空間に変えられていく風潮にあらがい、過去を引きずった毛深くて奥行きのある場所性を失うまいとした、と言えるだろうか。

そうして第1号として、85年にカフェ（ritz／リッツ、現家具屋）を開いた。ケヤキの下に立つコンクリート打放しの角ばった本体からブリッジが伸びる姿は今見ても若々しい勢いが表れていてまぶしい。美術畑出身の小見さんは並行して市街地などの各所で演奏会、映画上映会、演劇公演など、アート系のイベントを行いながら、もしリッツの運営を10年続けることができたら、次はアートセンターを開設しようと考えていた。

幸い予想以上に順調に進み、念願のアートセンター（F・ritz／フリッツ）が2年前倒しの8年後、93年に完成した。その姿は一転して、サンダーバード2号の格納庫をイメージしたという半円ボールト状の鉄骨2階建て。ヒマラヤスギに覆われるように立ち、リッツと対をなして男女に擬せられている。最初に開いた世界の最先端を行く現代美術の展覧会が、思うような結果を得られなかったという経験を経て、絵本屋に転じて軌道に乗り、アートギャラリーの運営とともに現在に至っている。「大人を修理するのは難しい、まず子どもたちに美しいものと出会ってほしい」とは小見さんの言。

Special Feature Large-Area Design by Architects
Case Study 04
Carve the Forest

樹木とともに育つ建築が加わる

それから26年後の2019年、3棟目の建物としてスダジイの脇にパン屋が建てられた。フランスから搬送された窯、作業場、それにタバコ屋の店先のような売り場が付いているだけの木造2階建ては、建築と呼ぶのは大仰で小屋の風情。アスファルトシングル葺きの片流れ屋根は煙突との離隔距離の必要から大きくねじられていて、パンを求めて近づいてくる人の視野に屋根面と軒裏が同時に入り、軒をくぐるという行為を自覚させる。垂木はスダジイを避けながら店先の軒下空間を確保するために長さを変えている。あたかもスダジイと小屋の双方が、植物と建造物の境界などないかのように、相互に距離を測りながら触手を自在に伸ばしあい、絡みあっているかのようだ。外部、内部を問わず、すみずみまで目が行き届いた設計上の丁寧な配慮が簡素な小屋に瀟洒な品格をもたらしている。設計者は藤野高志さん。アートセンターでのブックフェアの際に小見さんと出会い、それをきっかけに交流が始まっていた。

パン屋の位置が定まり、既存の2棟、リッツとフリッツとのあいだに生まれる戸外のスペースを広場に見立て、そこに「100年のモミの木」を大勢の子どもたちと植え、井戸を掘って水飲み場を設け、クラピアで地面を覆って寝転がれるようにするなどの試みが続けられている。大人たちがパンを片手に、フリッツの一角で営まれている日替わりのコーヒースタンドで求めたコーヒーを飲むかたわらで、子どもたちが駆けまわって遊ぶ場となっている。月に1回はファーマーズ・マーケットが開催され、近郊の農家などが出店してにぎわう。「モミの木」が育って大きな樹陰が生まれる頃には、それを植えた子どもたちが彼らの子どもを連れてくつろぎのひとときを過ごす場になるかもしれない。ここではそのくらいの時間のスパンが想定されている。なにし

ph.no. 2

左に「敷島のパン屋」、中央に「フリッツアートセンター」、右の黄色い手すりの階段を登ると「リッツ」。中央右にはヒマラヤスギ。

ph.no. 3

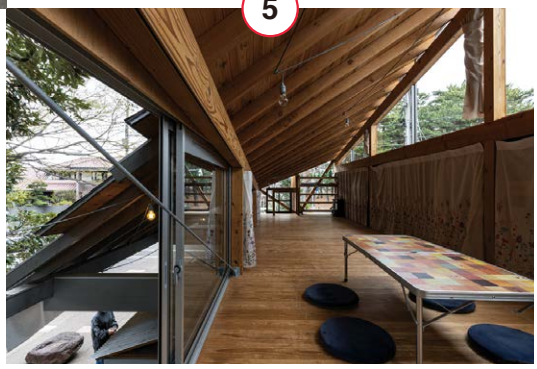
「敷島のパン屋」外観。テイクアウト専門のため、晴れた日には中庭でパンやコーヒーを楽しむことができる。

ph.no. 6

ph.no. 4

写真右／湾曲した屋根はスダジイを避けながら軒下空間をつくり出す。
下／２階の休憩スペース。スダジイの枝ぶりにも近く、木陰にいるかのような空間。

ph.no. 5



↑軒下空間でパンを買う。フランスから輸入した窯で焼いているため、いたるところに薪のストックがある。

ろ広場の一角にころがっているふたつの大きな赤い石は、2万3600年前に遠く浅間山の山体崩壊によってここまで流れ着いたもの。それからすれば100年、200年は一瞬のまばたきにすぎないのだ。

少しずつ分譲し複数の人たちが共有する場へ

このパン屋の計画は足かけ3年におよび、当初は賃貸も考えられたが、結局は分譲とされた。小見さんがこの土地のありようの遠い先を見通したとき、個人所有から脱し、複数の人たちによる所有へと移行するのが妥当だと大きく舵を切ったからである。現在、2区画めの分譲がなされ、藤野さん設計によるチェコの雑貨を販売する職住一体の住宅の工事が始まっている。利根川の方向に大きく開ける眺望を生かすため、屋根を3段に分けてデッキを敷き、上へ上へと登って行けるようにしている。即ち屋根がそのまま床となり、木の枝のあいだにテントをかければそこが戸外の居場所となる構成。屋根に登りやすいようにしておくのは、たくさんの落葉を処理するのに都合がよいという現実的な理由もある。

こうして今後、長い時間をかけて、この土地の固有の状況や特質をよく理解したうえで分譲を望む人が現れるのを待つという。その方向性を探るために小見さん自身、100枚に達しようかというスケッチを描き、言葉を記し、それに呼応するように藤野さんのほうでは法的な接道条件を満たすべく執拗に考え抜き、幾多の計画案を重ねてきている。

現時点での計画案では、できるだけ小さなボリュームの職住一体／近接型の建物を10数棟、樹木を避けつつも絡み合うように散在させている。それぞれの棟はスタイルも素材も自由だが、屋根を床として枝葉とのあいだを屋上の居場所とする構成が共通の形式とされようとしている。

そうとしつつも、計画案はめざすべき最終形ではなく、流れ着いては去っていくひとつの過程としてとらえられている。悠久の時間軸上の束の間の断面とでもいえるだろうか。現実からすれば、ここには居を構えながら店舗を開いたり、工房を営もうとする人が望まれていて、計画案は彼らの出現を募るための一種の呼びかけのツールである。そうして名乗りをあげた人の意向を汲みつつ、全体計画の進路はそのつど細かく見直され、終わりのない書き換え、尽きることがない調整が続けられていくはずである。

Special Feature Large-Area Design by Architects
Case Study 04
Carve the Forest

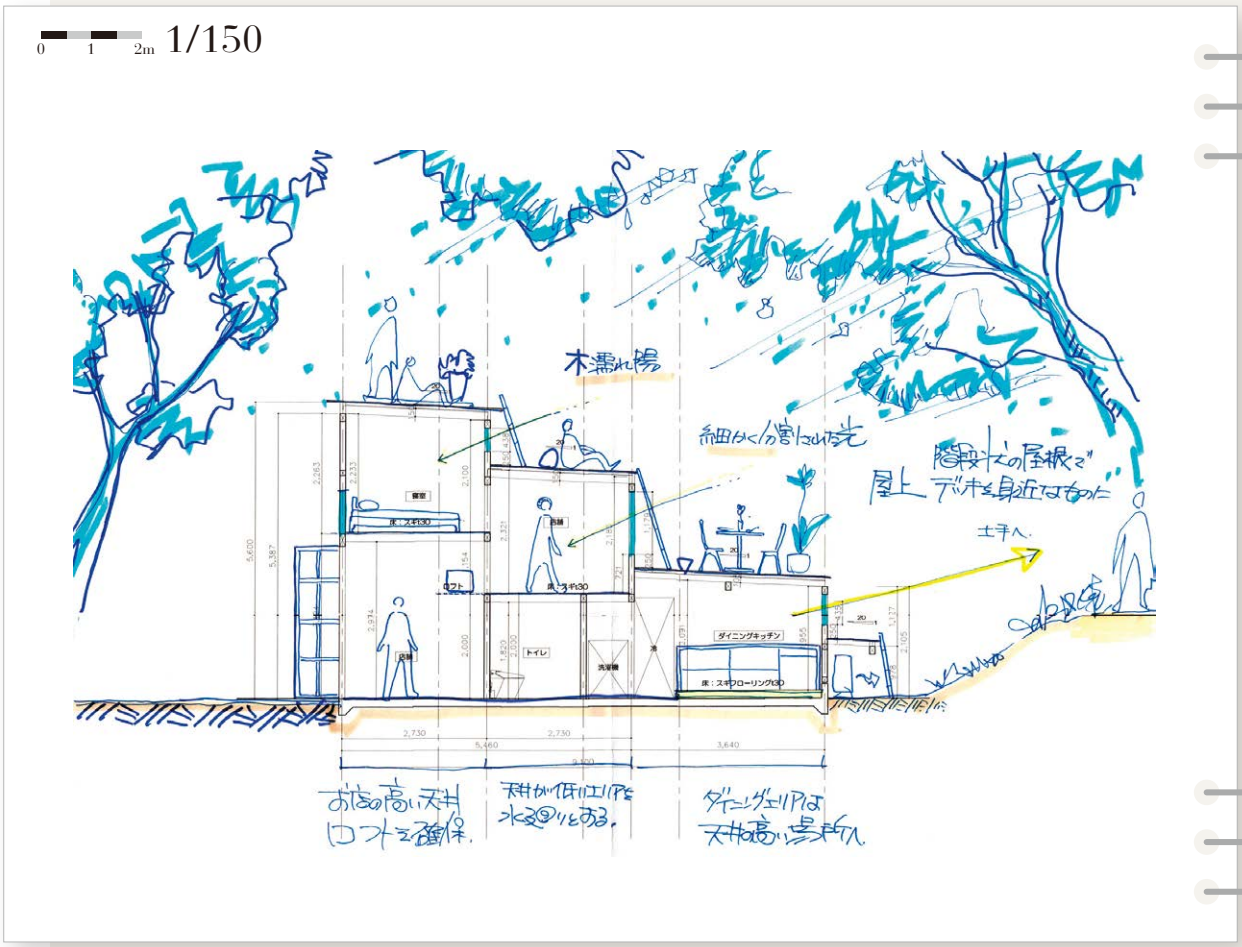
永遠のアルカディアをめざして

とはいっても、たとえば土地を分譲すれば樹木も一緒に分譲されることになるなど、個々の所有者の権利と全体のたたずまいを保持するためのゆるやかなルールとのあいだに軋轢が生じないかなど、生じたとしても調停の妙策が見出せるか、課題は決して少なくはないはずだ。そう考えると、オーナーの小見さんと設計者の藤野さんが手を携えて切り開こうとしている航路は、外形は穏やかでありながら、その本質はきわめて挑戦的で過激な戦いを孕んでいるのだろう。

この場所全体の名称を小見さんは、ヘンリー・ソロー「You must get your living by loving.（生業を愛して生計を立てていかねばならない）」の言葉から将来的に「liv.」としたいと考えている。楽しんで働き、喜びをもって日々を送ろうとする人びとが、職住一体をめざすこの場所に集い、現代の、いや永遠のアルカディアとなってほしいというメッセージなのだろう。

建設中プロジェクト

階段状の構成で、
屋根上を床に、
樹木を屋根に



建設中プロジェクトの断面スケッチ。「敷島のパン屋」に次ぐ分譲区画で、チェコ共和国の雑貨を販売する店舗兼住宅として計画。既存の樹木を避けながら配置され、階段状に屋根が3段連なる構成。屋根上にデッキを敷き、木々を屋根に見立てた生活を構想している。

ph.no. 8

建設中の風景。敷地の南端、利根川に最も近い場所に位置する。階段状の構成は、利根川への眺望も確保する。

ph.no. 7

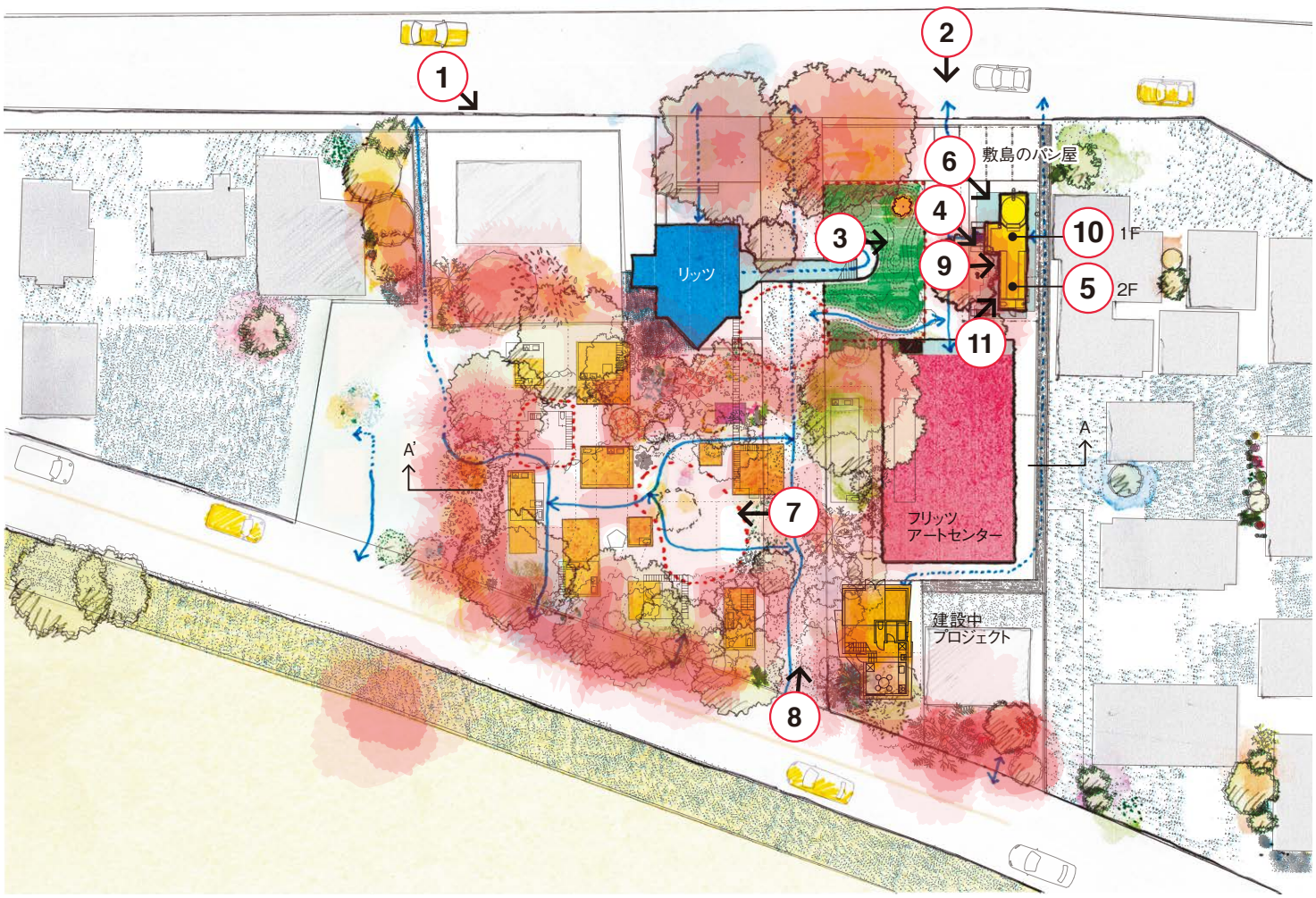
建設中プロジェクトの向かい側の敷地。現在は駐車場として利用されているが、順次分譲していく予定。

「林を彫刻する」全体の配置図

N

0 4 8m

1/650



A-A'断面図

0 2 4m

1/350

ph.no. 11

「敷島のパン屋」外観。

林を彫刻する

建築概要（敷島のパン屋）	
所在地	群馬県前橋市
主要用途	店舗併用住宅
設計	生物建築舎
構造	木造
施工	建築舎四季
階数	地上2階
敷地面積	135.09㎡
建築面積	49.91㎡
延床面積	59.29㎡
設計期間	2015年9月～2018年8月
工事期間	2018年9月～2019年4月

おもな外部仕上げ（敷島のパン屋）	
屋根	構造用合板
	アスファルトシングル葺き、
	ガルバリウム鋼板小波
壁	硬質木片セメント板、
	モエンサイディング シリコン塗装、
	ステイン塗装、
	構造用合板 モルタル金ごて仕上げ
開口部	アルミサッシ、スチールサッシ
外構	植栽（スダジイ、ヒメシャラ、クラピア）、
	石板敷き

おもな内部仕上げ（敷島のパン屋）	
売場	
床	土間コンクリート
	モルタル金ごて仕上げ
壁	ラワン合板 キヌカ塗装
天井	ガルバリウム鋼板小波現し
控室兼住居	
床	スギ板
壁	ガルバリウム鋼板素地張り
天井	垂木現し キヌカ塗装、
	スギ板野地現し キヌカ塗装

Fujino Takashi
藤野高志

ふじの・たかし／ 1975年群馬県生まれ。98年東北大学工学部建築学科卒業。2000年東北大学大学院都市・建築学博士前期課程修了。清水建設本社設計本部、はりゅうウッドスタジオを経て、06年生物建築舎設立。東北大学准教授。おもな作品=「天神山のアトリエ」(11)、「貝沢の家」(15)、「ケーブルカー」(20)。

「敷島のパン屋」1階内観。パンの製造から販売まで、すべてこの部屋で行う。照度を落とした落ち着いた空間。

ph.no. 10

スダジイと屋根を見上げる。木陰と軒下が一体化した場所を生み出した。

ph.no. 9

「敷島のパン屋」断面図

0 1 2m

1/120

ルイス・カーンの口癖は、「2時間ばかりやっていかないか」であった。その声をかけられた所員は覚悟しなければならなかった。2時間で終わることは決してなく、夜を徹することを意味したからだ。そして、そこで行われたのは必ずしも製図ばかりではなかった。

ルイス・カーンの事務所の特徴は、建築を創作することと同じくらい、「建築とは何か」について議論し、深く考えをめぐらせ、そしてそれを建築にすることが求められた点にある。そのため、カーンは昼夜製図室にいて、製図板から製図板へ渡り歩き、休みなく一人ひとりのドラフトマンとのエスキスを繰り返していくのだが、その場にいる2、3人を捕まえては雄弁に語りはじめ、自分の理論や原理を説明し、平面でも断面でもディテールでも、「デザインするうえで何が重要なのか」をくわしく説いてまわった。結果、所員は製図する時間を削り、カーンとの議論に没頭することになるのである。

その過程を繰り返すことで、カーンの頭のなかで全体像が構築され、それをバラバラにして所員に分担させた。つまり、所員は階段の担当、トップライトの担当、といった具合に振り分けられ、全体像がわからないままにスタディに取り組まなければならなかった。たとえば、劇場を担当していたスタッフのひとりは、数カ月ものあいだ客席の配置だけをスタディしていた。カーンは最初に「劇場は観客が観客に出会う広場だ」という言葉だけを発し、そのスタッフは日夜その言葉を頼りに考えつづける。カーンははじまり（初源）を大事にしていた。劇場とは何か、観客とは何か。その初源は何かという具合に問いかけが始まり、模型や図面での会話を超えて、言葉での対話がカーンの思考を刺激した。それこそがカーンが所員に求めていたもので、カーンが芸術家や哲学者として評される理由はここにある。

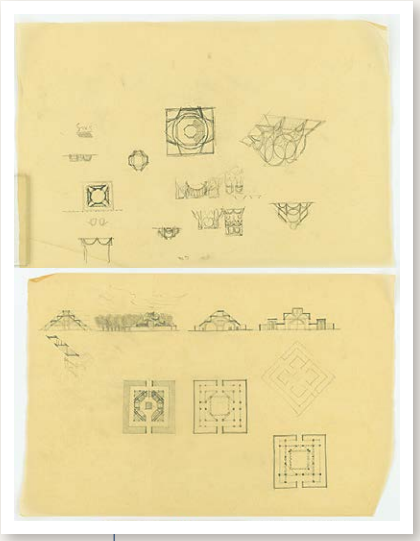
そのため、カーンの事務所は建物の4階と5階の二層を間借りしており、5階は大学のスタジオのような雰囲気で製図板が並んでおり、若手がカーンと議論し製図する場で、4階はベテランのスタッフが建築として実現させるための場として棲み分けがなされていた。

カーンの部屋は4階の応接間の横にあり、カーンは、口にタバコをくわえながら、黄色いトレーシングペーパーに木炭かやわらかい鉛筆でスケッチをする。気分が乗ったときは、そこにパステルをいれた。所員が描いた図面を下敷きにすることもあれば、自ら直接描くこともあった。幾何学的なパターンが描き込まれ、その各単位の内部および各単位相互間に生まれる空間の組織を検討していく。そして、スケッチはだんだんと緊密になり、建築の姿が現れてくる。ウォルター・マッケイドによれば「彼はすばらしい話し手である。しかも早く雄弁で、同様な意味でスケッチの達人でもある。彼との対談は、トレーシングペーパーの上に描かれた簡潔で強調的な濃い鉛筆のスケッチの連続だともいえる。彼はロールを流してダイヤグラムを埋める。一晩中つづけて紙がなくなるとき、朝がしばしばくるのだ」。

カーンから
与えられつづける
「問い」。

そのようなカーンの事務所には、同時代の雑誌や書籍はなかった。あらゆる影響を排除するかのように、寄贈された雑誌などはすぐに処分された。その一方で、古典建築の図集やボザールの書籍、古い百科事典などが備わっていた。歴史を出発点として考えていたカーンは、建築のことでも初源を求めていたのである。そして、弟子たちが揃って口にする回想は、「Don't be a secondary Kahn. I am myself, you are not.（第二のカーンになってはならない。私は私だが、あなたは私ではない）」の言葉である。確かに、第二のカーンは生まれていない。しかし、カーンの思想は広く世界中に流布している。それは、カーンの教育者としての影響力を物語っている。弟子のひとりである香山壽夫によれば、カーンが講義に遅刻することはなかったという。なぜなら、「学生との議論が一番の勉強になる。それを逃すことほど惜しいものはない」からだ。

設計事務所のリーダーシップのあり方は難しい。プロジェクトが世界に点在し、ボスが多忙になるほど、スタッフとの関係は希薄になりがちだ。指示待ちのスタッフであれば、ボスの不在時は手持ち無沙汰におちいりがちだろう。しかし、それが晦渋（かいじゅう）な「問い」を解く指示だとすれば、一条の光明を求めて、ボスの不在時こそチームで議論を活発に交わす有機的な組織となる秘訣なのかもしれない。



↑幾何学的なパターンから始まるカーンのスケッチ。

ルイス・イザドア・カーン
Louis Isadore Kahn

1901年、当時ロシア帝国のエストニア地方にてユダヤ人の家系に生まれる。05年にアメリカのフィラデルフィアに移住。ペンシルベニア大学卒業後、事務所での修業とヨーロッパへのグランド・ツアーを経て、35年にフィラデルフィアにて独立。ウォールナット（Walnut）通りと17丁目の角にあった日刊紙イブニング・ブレティンの最上階の5階と4階に事務所を構える。57年から74年までペンシルベニア大学にて教鞭をとる。事務所から徒歩20分の距離というのが重要であった。1974年逝去。

やまむら・たけし／1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。06年バルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。12年同大学院博士後期課程修了。12～15年ドミニク・ペロー・アルシテクチュール勤務。16年YSLA Architects設立。早稲田大学専任講師などを経て、20年東京工芸大学准教授。博士（建築学）、一級建築士。

古写真で
みる
建築家の
アトリエ

第5回

古写真を発掘し、
昔の建築家の
アトリエをのぞく。
この場所で、
名作が生まれた。

朝までつづく禅問答のような議論

文／山村 健
Yamamura Takeshi

42～43ページの画像4点／ Louis I. Kahn Collection, University of Pennsylvania and Pennsylvania Historical and Museum Commission.

↑議論するスタッフか。カーンからプログラムが書かれた紙が渡され、適正寸法を調べながら正方形で構成していくところから始まった。

ルイス・イザドア・カーン
Louis Isadore Kahn

Alamy ／ PPS通信社

←アトリエやスタジオというより事務所＝Officeという雰囲気が漂っている場所。一番奥にカーンらしき姿も確認される。

吉村に至る

八ヶ岳の家　設計／吉村順三

Yoshimura Junzo × Fujimori Terunobu

1

1／ゆるい斜面に立ち、折れ曲がった先が2階建てとなり、その1階をくぐって、階段を上ると2階の玄関が現れる。

ライトに始まり、

連載 現代住宅併走 第五十六回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後 均

吉村順三の住宅について、ずっとわからないことがあった。長方形平面を途中でちょっと折って曲げたりするが、直角ならまだしも、少しだけ微妙に折るのはなぜなのか。

そのひとつ、1989年につくられた〈八ヶ岳の家〉について、建築家の寺本健一が「集大成だと思う」と言うし、確かに最晩年の作だからその可能性もあるが、建築は見ないことには話にならないから行ってきた。

八ヶ岳の東の山麓に広がる高原地帯のゆるやかな斜面に、目指す別荘は、低い木立に巧みに見え隠れするようにして立っている。

外を一巡し、中をざっと見た後、折って曲げた効果を確かめるべくベランダの隅に立って、振り返るようにして全景を眺めた。

いい。やはりいい。差し出す軒と壁が一体となって途中で曲がり、その小さな曲げによりそこに空間の溜まりが生まれ、視線はとどまり一時くつろいだ後、また先へと流れていく。意外にも、一時、とどまることで、かえって軒と壁からなる面の連続性は伸びやかな印象を視覚に与えることに成功している。もし、直線のままだったら、視線はそのままかなたに消え去るだけ。

立面の、ひいては平面の伸びやかさを印象付けるためわずかに曲げた、とするなら、なぜそんな珍しいことをわざわざしたのか。

かつて吉村の手になる新宮殿の屋根にのる鳳凰像について尋ねたときのことを思い出す。長くじっと考えられてから、一言、「気持ち、いいでしょ」。

その建物を外から眺めて、中にいて、気持ちがいい――おそらくこれが吉村の建築に関する理論にして感性だった。

20世紀のモダニズム建築における立面と平面の伸びやかさの魅力の元をたどると、吉村の前にはアントニン・レーモンドがいて、さらにその先にはフランク・ロイド・ライトがいる。レーモンドは細長い「赤星鉄馬邸」(1934/『TOTO通信』2021年新春号)を折っているし、ライトの建築空間の20世紀建築誕生への最大の功績は、ヴィンセント・スカーリイによるとその伸びやかな「流動性」にあった。ライト、レーモンド、吉村の三者は、師弟関係においてつながるのみならず、空間の質においても同じ流れをくんでいた。

微妙に折ることの謎がわかったのに一安心して、室内に戻り、ゆっくりじっくり眺める。

まず各部屋の広さから。ふつう広さの件は格別確かめたりしないが、吉村は「気持ちのいい室内の広さは九間(ここのま)で、これは海外でも変わらない」と言っていた。九間とは日本の伝統空間の広いほうの基本として古来知られ、3間(けん)(5・4m)四方の9坪をさし、能舞台も九間。

図面で確かめると、主室のうち居間空間とピアノ空間は九間をふたつ並べているし、その隣の和室も九間で、さらにその隣の寝室2室も合わせると九間。そうして成立した三連の九間を基本とし、山側と谷側に2間幅の主寝室や食堂や台所などをま

2

3

2/斜面の下の1階から2階のテラスを見上げる。「レーモンド・夏の家」(1933)の旧状をしのばせる。

3+4/1階を通り抜け、反対側の階段を上ると左手が玄関。

4

5

5/途中を折ることで、かえって伸びやかさが印象付けられる。

6

6+7／ピアノ、居間、食堂、台所はひとつの空間に納まり、食堂と居間のあいだに両側焚きの暖炉が置かれ、〝火こそ住まいの中心〟の思想を見事実現することに成功した世界唯一の現代住宅となった。

7

8

9

8＋9／主室は山側テラスに連続する。左写真は寝室A。

10

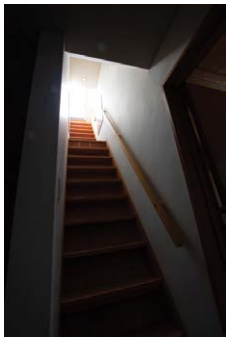
11

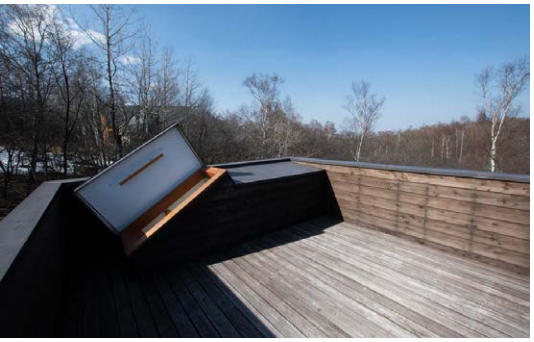
10＋11／和室は伝統を尊重している。お茶用の水屋も付く。

12

13

12＋13／吉村流の少し傾いた踏面の急階段を上ると、屋上の展望台へ。水平を基本としながらも、一部に垂直の動きを入れるのが、ライトの「落水荘」に通じる。





わして囲み、この家の平面は成り立っている。

途中で折ることの謎が解け、九間を基本単位にしていることを確認し、今日来た甲斐があったと満足し、ソファに腰を沈めて室内を眺め、暖炉に目をやる。マテヨ、いつもとチガウ。吉村は暖炉の名人として知られ、「軽井沢の山荘」（1962／『TOTO通信』1999年Vol.4）ではブロックを並べただけの最も簡単な暖炉を、「脇田和アトリエ山荘」（1970）では生コンをぶちまけた大胆不敵な暖炉を実現しているが、そうした先例はいずれも壁際に据えられていたのに、ここでは室内の中央に、正確にいうとソファのある居間空間と椅子、テーブルの置かれた食堂空間の境に据えられているではないか。

主室の中央に暖炉を据えるというまれな例としてはレーモンドの「軽井沢新スタジオ」（1962／『TOTO通信』2011年夏号）が名高いが、師の先例よりうまくいっている。戦後住宅の平面計画の歩みを知る建築計画学者に採点させたら、こっちのほうが点は高いだろう。

戦後の日本の住宅は、戦前までは各部屋としていた居間（L）、食堂（D）、台所（K）の一体化（LDK）を目標とし、まずは集合住宅の公団住宅で、次に建築家による中小戸建て住宅で実現し、ついには面積にゆとりのある邸宅にまで広がって今に至るが、しかしLDK化と暖炉との空間構成上の相性は決して良好ではなかった。

暖炉をつくらなければなんの問題もないが、〝火は住まいの中心〟と考える一部の建築家にとって、居間の壁に取り付けた暖炉は、食堂からは位置が大きくズレてしまう。居間のソファでくつろいでいるときも楽しく飲食しているときも、両方の場の正面位置にあってこそ、〝火は住まいの中心〟となるのに。

レーモンドは平面の主室の中心に構造体を兼ねた円型の両側焚きの暖炉を据えたが、暖炉の存在感があまりに強すぎ、設計事務所を兼ねる別荘としてはよくても専用の住宅には向いていない。

吉村がここで初めて試みたこの暖炉のあり方なら、LDKと火が矛盾なく同居可能になる。

〝火は住まいの中心〟との思想は、20世紀の世界のモダニズムのなかでは無視されてきたが、火ははずすわけにはいかないと考える一群がいて、吉村もそうだったし、レーモンドも、ライトもそうだった。ライト晩年の最高傑作「落水荘」（1936）の建設にあたり、ライトは、滝に迫り出す大きな岩の上で直接、火をたいてそこを暖炉とし、周囲には居間や食堂を広げるようにして家全体を構成している。

吉村順三がライトをどう見て

最初の施主はこの別荘地の開発者であり、敷地は自由に選ぶことができた。

八ヶ岳の家

建築概要	
所在地	長野県南佐久郡南牧村
主要用途	別荘
設計	吉村順三
施工	西洋環境開発・北村建設JV
敷地面積	4,360.12㎡
建築面積	303.64㎡
延床面積	370.90㎡
階数	2階
構造	鉄筋コンクリート造（1階）＋木造（2階）
竣工年	1989年
図面提供	吉村順三設計事務所

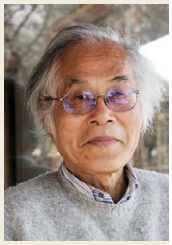
吉村順三

1908（明治41）年、東京は本所の呉服店の子として生まれ、31年、東京美術学校（現・東京藝術大学）を卒業し、在学中から通っていたレーモンドの事務所に入り、「レーモンド・夏の家」に影響を受ける。戦中に独立し、戦後になると、木造モダニズム系の建築とりわけ住宅にすぐれ、後進に多大な影響を与えたばかりか、建築とは無縁の市民のあいだにも“吉村ファン”が生まれる。97年、88歳で没。私の知る限り最も志操堅固にして無口な建築家であった。

写真／川澄・小林研二写真事務所　Yoshimura Junzo

藤森照信

建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞、「ラコリーナ近江八幡草屋根」（15）で日本芸術院賞。

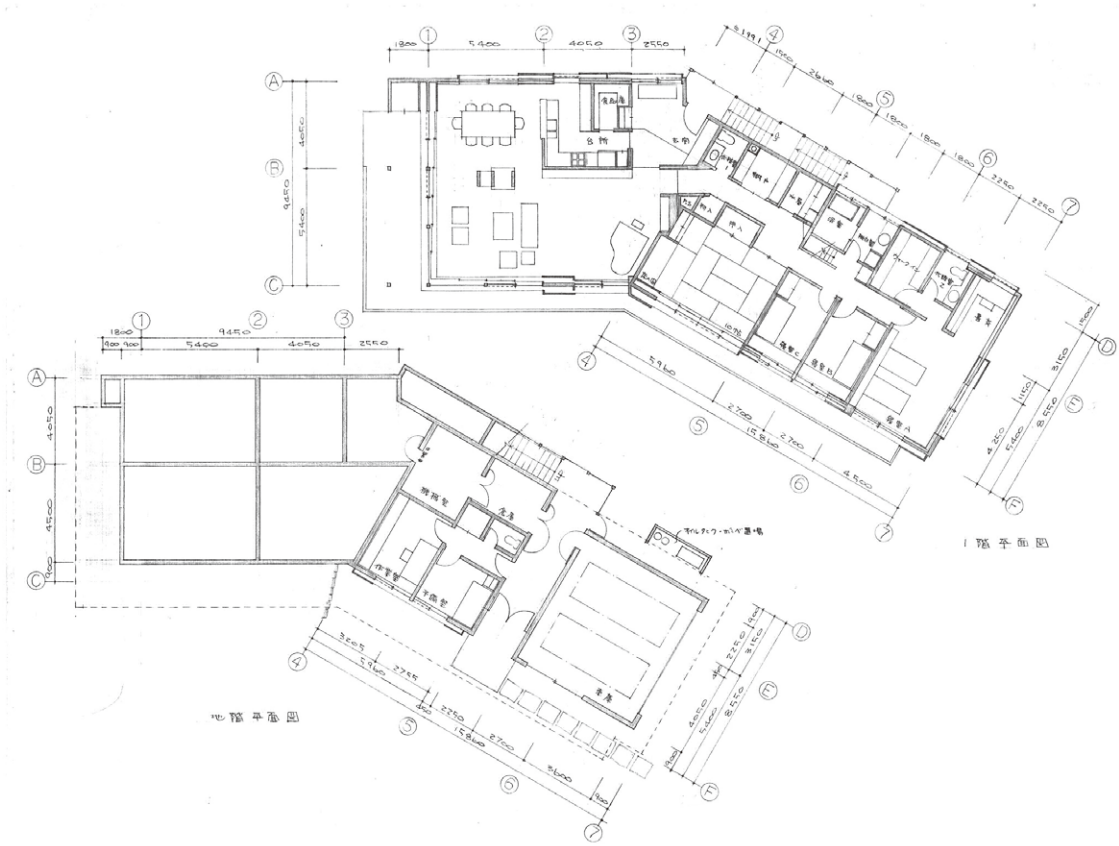


Fujimori Terunobu

平面図

0　2　4m

N 1/350



現代住宅併走

Yoshimura Junzo × Fujimori Terunobu

いたかは聞きそびれたが、直接学んだレーモンドの奥にライトを見ていたのは間違いない。この住宅がここにつくられたのは吉村の手になる「八ヶ岳高原音楽堂」（1988）との深い関係によるし、音楽堂の多角形を用いた平面と水平に伸びる寄棟屋根は、吉村の作品のなかでも最も露わにライトの影を見て取ることができよう。

少し折った伸びやかな立面といい、九間による平面といい、巧みな暖炉といい、集大成だと言ってもいい、と私も思う。

ライトの晩年の傑作は、滝と水流の上に迫り出すように床面を伸ばしていたが、この家も、斜面の上に1階分迫り出して立つし、伸びやかに翼を広げる屋根の上に塔状の突起が小さく立つのは、ライトも吉村も共通する。

とすると、〈八ヶ岳の家〉は吉村による「落水荘」というより、20世紀の世界のモダニズム建築の流れのなかで、1936年の「落水荘」に始まるひとつの質は、53年して〈八ヶ岳の家〉に至った、と評したほうが歴史的には正しいだろう。

東急歌舞伎町タワー

TOKYU KABUKICHO TOWER

南側から見た外観。

世界有数の繁華街、歌舞伎町の水まわり

取材・文／大山直美　写真／川辺明伸

歌舞伎町に現れた超高層複合施設

今年4月14日、話題の超高層複合施設「東急歌舞伎町タワー」が開業した（ホテル開業は5月19日）。地上48階地下5階建てのビルは大規模開発では珍しく、オフィスがなく、おもにブランドの異なるふたつのホテルと、映画館、劇場、ライブホールといったエンターテインメント施設からなる超高層複合施設。設計は久米設計・東急設計コンサルタント設計共同企業体。

東急といえば渋谷が本拠地だが、じつは新宿とも浅からぬ縁がある。戦後、焼け野原だった現在の歌舞伎町に繁華街をつくりたいと尽力した町会長の鈴木喜兵衛や東京都建設局の石川栄耀をはじめ、複数のメンバーがいたが、そこにかかわったのが東急グループの事実上の創立者、五島慶太であり、五島とともに昔この地にあった新宿東急文化会館をつくりあげたのが、五島の義弟である久米設計の創業者、久米権九郎だった。

約70年近い時を経て、奇しくも両社がタッグを組み、跡地に歌舞伎町の新しいシンボルをつくることになったのだ。

本プロジェクトは都市再生特区と国家戦略特区の認定を受けている。これまでの大規模開発は、交通拠点との接続といったハード面の整備によって、容積緩和を受けるケースが多かった。しかし、今回はそれだけではなく、歌舞伎町という類い稀な「観光資源」を生かし、街の魅力を高める核となる建物のあり方を考え、エンタメ系やホテルを充実させるといったソフト面が、自治体が目指す「世界のエンターテイメントシティ歌舞伎町」に寄与する計画と認められたことが容積率の緩和につながったという。

外装デザインのディテール。噴水をイメージしたもので、永山祐子氏のデザイン。

当初から今回のプロジェクトにかかわってきた久米設計の井上宏さんはこう振り返る。

「昔まちづくりにかかわった人びとの先進的な考え方から、歌舞伎町の第一歩が始まった歴史をあらためて感じました。だから、われわれも単に建物をつくるのではなく、どうすれば未来の歌舞伎町がよくなっていくかを、事業者のみなさんと長い時間をかけて考えていったんです。これだけ資源が豊かな街をそのまま縦に伸ばしたような街の核となる建築をつくれば、歌舞伎町がさらに発展すると信じて突き進んでいった感じでしたね」

噴水をイメージした特徴的な外装デザインを手がけたのは、建築家の永山祐子さん。東急の河添麻以さんによると、まだ超高層のデザインを手がけたことがない次世代建築家に依頼したかったことと、男性的な西新宿の超高層に対し、もっとエンタメ感あふれる女性らしいデザインにしたかったことが起用の理由だそうだ。

井上さんによれば、同タワーは細かいピッチで柱を立てるホテルの下に、映画館や劇場といった柱のない大空間が入るため、構造上の切り替えが難しく、苦労したという。「斜柱」と呼ばれる柱をうまく活用し、力を柔軟に斜めに受け流すという、特殊な構造フレームによって対応している。

シャワーだけでも十分な歌舞伎町のホテル

タワー内にはブランドの異なるふたつのホテルがある。18、20～38階が歌舞伎町を遊び倒したい若い世代向けの「HOTEL GROOVE SHINJUKU, A PARK-

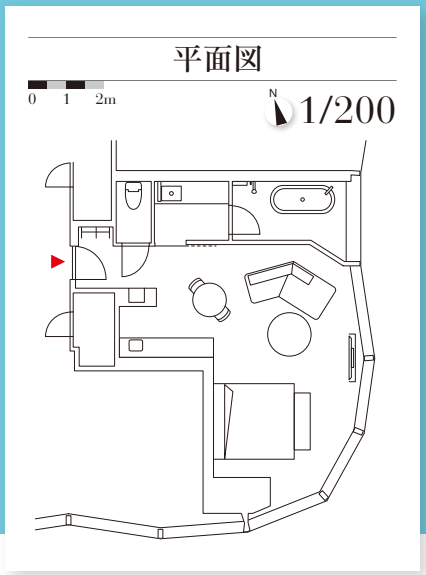
38階

南東隅の特徴的な部屋。バスルームがガラス張り。オーバーヘッドシャワー付き。

開放的な部屋だが、トイレは囲われている。

↓ ビューバスからの眺め。フルハイトの開口部から都市の風景を見渡すことができる。

ベッドまわり。ベッドの足元に窓があり、朝一番から絶景を楽しめる。 ↑



ホテルの水まわり

ROYAL Hotel」、18、39〜47階が超富裕層向けの「BELLUSTAR TOKYO, A Pan Pacific Hotel」という構成だ。いずれも東急ホテルズ&リゾーツが運営する新ブランドで、今回取材したのは前者。地域に根ざした歴史や文化、歌舞伎町でしか味わえない体験ができるホテルを目指したと語るのは、先ほどの河添さん。

「歌舞伎町というと、ネオンやカオスや派手さをイメージしがちですが、そういうものを味わいたいならリアルの街に勝るものはないので、ホテルは余韻に浸れるアパートメントのような落ち着きが感じられる空間にしたいと考えました。ニューヨークで遊び疲れてホテルに戻り、ホテルは街と違って落ち着いているんだけど、窓からイエローキャブが通るのを見たりパトカーの音を聞いたりすると、あ、自分は今、ニューヨークにいるんだなと実感するような、そういったホテルでの体験が、意外と、旅の記憶に刻まれたりするんですよね」

各客室には窓辺にベンチやサイドテーブルが置かれているが、それもそうした余韻を味わう場としてしつらえたもの。また、ビビッドな幾何学模様のカーペットなど、特徴的な内装は旧新宿東急文化会館が竣工した1950年代のミッドセンチュリーモダンを現代風にアレンジして取り入れたという。

今回撮影した3室以外にも、3〜4人で泊まれる部屋など、個性的なプランが非常に多いのも同ホテルの特徴。高層棟は風を受け流すべく、平面が長方形の対角を切り落としたような形状をしており、部屋割りの際、先細った南北に変形の部屋をつくらざるをえず、じつは与件を逆手にとった苦労の賜物だそうだ。

たとえば、38階の「PARKROYAL Suite」は変形した南東の平面を生かした角部屋で、カーブしたワイドな窓に面してビューバスとリビングエリアを配置。国立競技場やスカイツリー、東京湾まで遠望でき、都心の風景が堪能できる。

また、「Accessible Twin」も北東隅にあり、車いす対応の客室だが、大きな引き戸を開けると全面開口に面して洗面台が配され、ことさらにバリアフリー仕様であることを感じさせないデザインが好ましい。

ちなみに、もうひとつのホテ

29階

一般的なツイン。ベッドが眺望のよい窓側に向けられている。手前にシャワーブースとトイレ。

25階

Accessible Twin

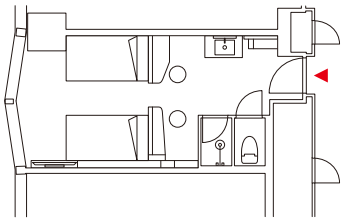
北東隅の特徴的な部屋。車いす対応のトイレやシャワーブース。他室と同様に眺望を生かした部屋。

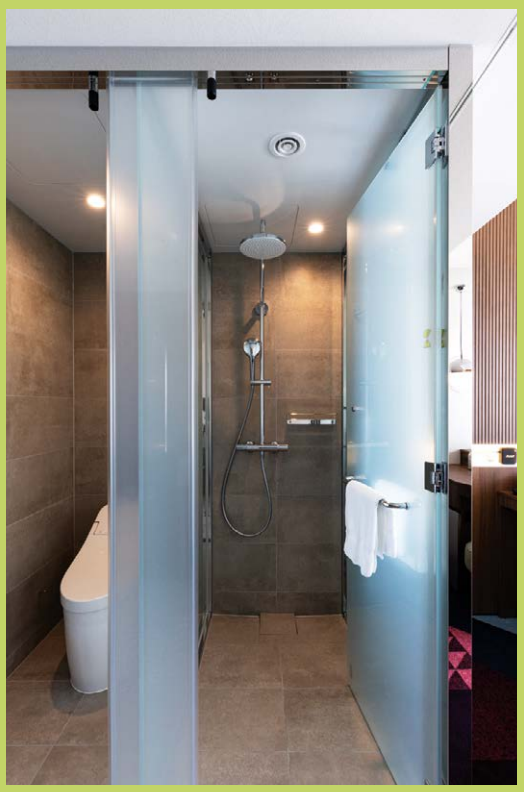
ツインベッド。奥の入口まわりにシャワーブースとトイレが並ぶ。

平面図

0 1 2m

N 1/200





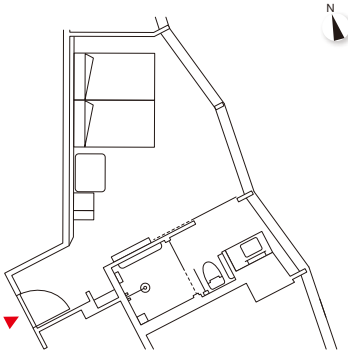
バスはないが、透過性のある高級感漂うシャワーブース。

シャワーブースからの眺め。車いすに対応しながらも都心の風景を望むことができる造り。

平面図

0 1 2m

N 1/200



シャワーブースは車いす対応のスライド式の扉。

7階劇場トイレ

パウダーコーナー

動線が交わらないように回遊性のある造り。西新宿の超高層ビル群を望める。

男性トイレ

女性トイレ

↑

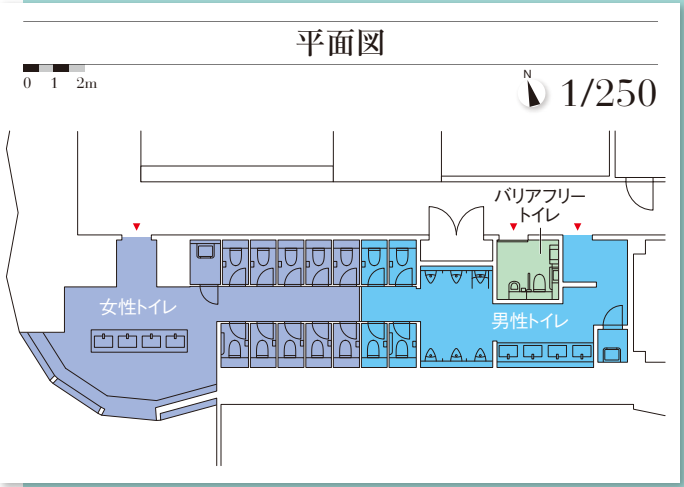
モノトーンの内装。女性トイレも含め、全体的に色使いが抑えられ落ち着いた印象になっている。

↓

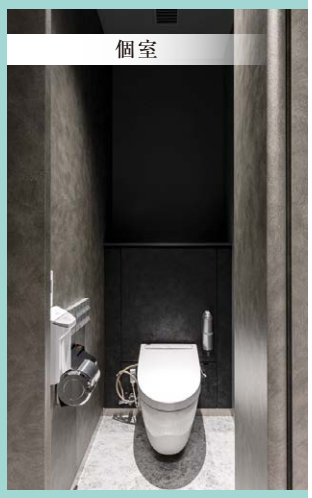
写真右／男女とも同じ仕様の個室。左／車いすやオストメイトに対応したバリアフリートイレ。

↑

劇場のため、多めの個室。奥の壁は可動式で、男女の個室の数を変動することができる。



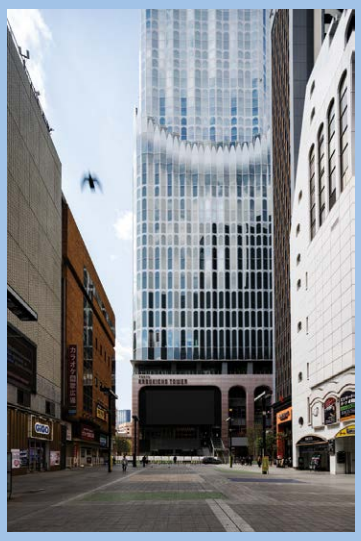
バリアフリートイレ



個室

東急
歌舞伎町タワー

TOKYU KABUKICHO TOWER



東側から見た外観。

建築概要

所在地	東京都新宿区歌舞伎町一丁目29番1号
事業主	東急株式会社、 株式会社東急レクリエーション
主要用途	ホテル、劇場、映画館、 店舗、駐車場など
設計	久米設計・東急設計コンサルタント 設計共同企業体
施工	清水・東急建設共同企業体
敷地面積	4,603.74㎡
建築面積	約3,600㎡
延床面積	約87,400㎡
階数	地上48階、地下5階、塔屋1階
高さ	約225m
構造	鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造
設計期間	2017年6月～2019年4月
施工期間	2019年8月～2023年1月

おもなTOTO使用機器

● ホテル（38F PARKROYAL Suite）
ユニットバス　ESG2130T
ウォシュレット一体型便器　CES9251TOKU

● ホテル（29F Deluxe Twin）
ユニットバス　ESG1217T1
ウォシュレット一体型便器　CES9251TOKU

● ホテル（25F Accessible Twin）
ユニットバス　JSG1616T
ウォシュレット一体型便器　CES9251TOKU

● 7F劇場トイレ
壁掛大便器セット・フラッシュタンク式
腰掛式壁給水壁掛大便器　CS530P#NW1
ウォシュレットPS2A　TCF5534#NW1
低リップUS一体型小便器　UFS900R#NW1
ベッセル形洗面器　LS916#NW1
台付自動水栓　TLE26007J

ル「BELLUSTAR TOKYO, A Pan Pacific Hotel」にはさらなる数のビューバスの部屋があるという。井上さんによると、外装のガラス壁にじかに接した浴室をつくるというのは、実は技術的に案外難しく、内側にかかった水が階下に及ばぬよう、取り合いを工夫することで、なんとか実現にこぎつけたとのこと。

このほか水まわりで特筆すべきは、バスタブのある部屋が少なく、一部シャワーブースのみである点。ホテルには寝に帰るだけという客層が多いことを想定し、その分、限られた面積の客室に広がりをもたせたかったと河添さん。

ただし、シャワーブースを囲む壁面は、単なる透明ガラスでも乳白ガラスでもない仕上げにこだわり、光沢感のあるフィルムを貼っている。

ハレの場にふさわしいトイレを目指して

次に、6～8階の劇場を見学した。

劇場を担当した東急の鈴木稔さんは次のように語る。

「ここでは演劇に限らず、ライブやアーティストの公演、アニメやゲームを原作とする2・5次元ミュージカルなど、多様な用途に使える場を想定しています。客席数は約900席ですが、1階席は演目に合わせて増減可能で、舞台を縮小して客席を増やしたり花道を出現させたりと、柔軟に対応できます」

もともと歌舞伎町という地名は、ここに歌舞伎劇場をつくりたいという町会長の思いを反映し、東京都の石川が命名したもの。その後、劇場計画は諸事情で頓挫してしまったが、先人たちのそうした想いを尊重し、舞台には花道やセリなど、歌舞伎のさまざまな仕掛けも用意されているという。

トイレは6階と7階に1カ所ずつあるが、劇場の1階席に直結した6階のトイレは休憩時間に大勢が並ぶことを想定し、女性トイレは一方通行で通り抜け可能なプランを採用している。

一方、7階のトイレで目を引くのは女性トイレのパウダーコーナー。映画館や劇場など窓の少ないフロアにあって、あえて西新宿の高層ビル群が一望できる南西の特等席に配置されており、開放感とリフレッシュ効果は満点。しかも、公演によって男女比が大きく変わるため、間仕切り壁の位置をずらせるつくりだそうだ。

「海外の街に行くとよく、広場の前に昔からあるホテルや劇場があって、特別な日におめかしして家族で出かける場になっています。そういう『グランドホテル』がコンセプトだったこともあり、トイレも人数をさばくだけでなく、身支度を調えてまた出て行くような、ハレの場にふさわしいものにしたいと考えていました」と井上さんは言う。

歌舞伎町の歴史をひもとき、未来を見据えて計画された新しいシンボルタワーの登場によって、懐の深い歌舞伎町という街が今後どう変化していくのか、楽しみに見守りたい。

東急株式会社
新宿プロジェクト
企画開発室
プロジェクト推進グループ
施設・基盤整備担当
主査

河添麻以

Kawazoe Mai

東急株式会社
新宿プロジェクト
企画開発室
プロジェクト推進グループ
施設・基盤整備担当
主査（取材当時）

鈴木 稔

Suzuki Minoru

株式会社久米設計
開発マネジメント本部
ソーシャルデザイン室
室長

井上 宏

Inoue Hiroshi

東急株式会社
新宿プロジェクト
企画開発室
プロジェクト推進グループ
施設・基盤整備担当
主査（取材当時）

保谷 潤

Houya Jun

偶然は用意のあるところに

CHANCE FAVORS THE PREPARED MIND

「京都市京セラ美術館」(*1)、「八戸市美術館」(*2)をはじめとする文化施設や美術展の会場構成など
芸術関係の仕事を数多く手がけている建築家・西澤徹夫氏の初の個展です。
氏はこの展覧会を「自らもいまだ気づいていない何かを発見するプロジェクト」ととらえています。
本展覧会を通して、訪れた人が建築の抱えている豊かな内面について想いを巡らし、
それらを見出す手掛かりになれば幸いです。

*1　共同設計者:青木淳
*2　共同設計者:浅子佳英・森純平

東京国立近代美術館
エントランスホールリニューアル
(開館60周年記念事業)
東京都、2012年

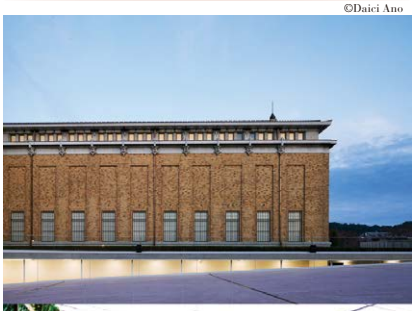
©Yutaro Tomii

©Norito Yamauchi

907号室の場合
東京都、2016年

京都市京セラ美術館
京都府、2019年、
青木淳建築計画事務所と共同設計

©Daici Ano



©Shin Hamada

西宮の場合
兵庫県、2016年、
酒井真樹・安藤僚子と共同設計

偶然は用意のあるところに

西澤徹夫

建築における全体とは、何のどこまでのことを指すのでしょうか。このことは、建築家が何を設計するのかということ、ひいては建築家とは何か、ということにもかかわるだろう、と考えてきました。都市も国家も外形をもたないシステムとしての信頼性は揺らいで、僕たちを統べる全体性のようなものはとっくに失われています。代わりに多様性というスローガンが薄く広がりながらあらゆる価値観を飲み込んでいったので、かえって何が切実なのかがわかりにくくなっているのかもしれません。だから、外形がない存在のあいまいさ、あらゆるもののコントロールの不可能性といった現代的な問題は、そのまま建築に流れ込んできているのだ、と感じてきました。建築が対象とする最終的な全体像は、最初から不在なのです。

一方で、その核心は明言できないけれど、周縁にて記述されるような存在が建築なのかなと思います。言葉による形容に、目の前の様相に、手の感触に、その確かさを感じることができるにもかかわらず、しかしその中心にあるべき何かとても豊かだが掴みきれないようなもの、は、周縁があることで初めて生まれるドーナツの穴のようなものです。それ自体は具体でありながら、本来掴みとりたいものはその背後にしか無いような気がする、という建築のこの働きこそ、僕たちを駆り立てるものの正体なのかもしれません。拡散していく全体像と、求心的で本質的な何か。では、どちらも後からやってくるこれらを予め計画するとはいったいどういうことなのだろ

Next
at
TOTO
GALLERY・MA

次回予告

能作文徳+常山未央展
Nousaku Fuminori + Tsuneyama Mio

自宅兼事務所の「西大井のあな」で実験を重ね、太陽、土壌、微生物、廃棄物とともに生命力のある居住域を築いている、ふたりの建築家の展覧会。都市のなかで資源を見出し、事物をつなぎ直しながら、建築のつくり方自体をデザインする彼らの実践とビジョンを紹介します。

会期
2024年1月18日(木)～3月24日(日)

TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日、
9月23日(土・祝)は開館、
夏期休暇、年末年始、展示替え期間
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

https://jp.toto.com/gallerma

会期：2023年9月14日(木)～11月26日(日)

西澤徹夫
Tezzo Nishizawa

©Maruyama Kai

にしざわ・てつお／建築家。1974年生まれ。2000年東京藝術大学美術研究科建築専攻修了。00～05年青木淳建築計画事務所、07年西澤徹夫建築事務所設立。23年より京都工芸繊維大学特任教授。「東京国立近代美術館所蔵品ギャラリーリニューアル」(東京都、2012年)、「映画をめぐる美術——マルセル・ブロータースから始める」展会場構成(東京都、2014年)、「Re: play 1972／2015—『映像表現'72』展、再演」(東京都、2015年)など展覧会会場構成、「京都市美術館再整備事業基本設計・実施設計監修」(京都府、2019年、共同設計=青木淳建築計画事務所)、「八戸市新美術館設計」(青森県、2021年、共同設計=浅子佳英、森純平)など、美術館・文化施設の設計に多くかかわる。「京都市京セラ美術館」で第8回京都建築賞、2021年日本建築学会賞(作品)、2020年度JIA日本建築大賞、第30回AACA賞、第62回毎日芸術賞など、「八戸市美術館」で2022年度JIA日本建築大賞、第43回東北建築賞など、受賞多数。

講演会情報

「西澤徹夫講演会
偶然は
用意のある
ところに」

日時　2023年10月5日(木)
17:30開場、18:30開演、
20:00終演

会場　イイノホール
(東京都千代田区内幸町
2-1-1飯野ビルディング4F)

定員　500名(予定)、参加無料

詳細は、TOTOギャラリー・間ウェブサイトにてご案内いたします。

京都市京セラ美術館開館1周年記念展
森村泰昌：ワタシの迷宮劇場
京都府、京都市京セラ美術館、2022年

©Fumitaka Miyoshi

©Osamu Sakamoto

光のメディア
東京都、東京都写真美術館、2022年

うか、と考えてきたように思います。

“Chance favors the prepared mind.”は細菌学者ルイ・パスツールの言葉で、幸運を呼び寄せる主体的な力、心の構え、のようなものこそが探していないものを発見する、という意味の格言として知られています。その建築が何を成しているのかに出合うには、そのような心の準備を必要とするし、それによって探し出していないものを探し出そうとする試みを、計画と呼んでいいのかもしれません。そうして絶え間ない準備作業の後、偶然に建築は発見できるのではないか、準備は後からそれが準備であったことを知るということだけが今できることなのかもしれないと考えています。そしてこの試みの最中に生み出される図面や模型といった表現もまた、ありうべき建築の核心部分を摑むための、日々の準備であるはずです。

本展は、僕自身がこれからどのような建築の計画を試みようとしているのかという、いまだ発見していない何かを探し出すためのプロジェクトです。これまでかかわってきた建築の計画が何を象(かたど)ってきたのかを、周縁的で断片的なオブジェクトから事後的に探ってみる試みもまた、建築がもつ豊かさへの扉となることを願っています。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと、
お役に立つ情報を心がけています。
あわせてご注目ください。

N News

TOTOの最新情報

News 2

TOTOバーチャルミュージアム更新について

TOTOミュージアムは2015年8月28日にオープンして、もうすぐ9年目を迎えます。バーチャルミュージアムも2022年6月の一般公開から約1年がたち、国内外の多くの方にアクセスしていただいております。今回、2022年8月の展示入れ替えに伴い、バーチャルミュージアムも2023年4月より16言語の多言語対応を含めリニューアルしました。是非、新たなTOTOミュージアムをバーチャル内で体験し、実際に現地にも足を運んで楽しんでいただければと思います。

ウェブ→
https://jp.toto.com/pages/knowledge/visit/museum/vr/

News 3

トイレにまつわるエピソードを川柳に募集期間は2023年6月12日（月）～8月25日（金）

第19回目となったトイレ川柳。今年もトイレでの面白話、思い出などのトイレにまつわるエピソードを募集しています。審査員の仲畑貴志氏は、日本を代表するコピーライターで、毎日新聞の人気川柳コーナーの選者としても知られており、第1回目より「トイレ川柳」の審査員を務めています。「ネオレスト賞（最優秀賞）」のほか、独創的な句を選出する「仲畑貴志賞」や、小学生以下を対象とした「キッズ賞」、中学生・高校生を対象にした「中学生・高校生賞」なども設けています。みなさまの思わず笑顔になる句をお待ちしています。優秀作品の20句は、トイレットペーパー型川柳集としてTOTO出版より発行予定です。

写真は第18回トイレ川柳集

ウェブ→
https://jp.toto.com/knowledge/useful/senryu/top/

News 1

reddotデザイン賞2023にて2商品受賞 iFデザイン賞2023にて1商品受賞

下の商品2点が、国際的なデザイン賞「レッドドット・デザイン賞2023（＊1）」と「iFデザイン賞2023（＊2）」を受賞しました。
また、THE CRASSOで全応募アイテムの2%未満にしか与えられない最優秀賞である「レッドドット ベストオブザベスト賞」に選出されました。「ネオレストWX」はダブル受賞となります。
TOTOは引きつづき、デザインとテクノロジーの融合を追求し、TOTOらしい商品をグローバルに普及させることで、「持続可能な社会」「きれいで快適・健康な暮らし」の実現に貢献していきます。

＊1　レッドドット賞：1955年から続く国際的権威あるデザイン賞。主催はドイツ・エッセン「ノルトライン・ヴェストファーレンデザインセンター」。デザイン専門家が革新性、機能性、品質を厳正に審査し認められた商品に送られる。
＊2　iFデザイン賞：1953年から続く国際的権威あるデザイン賞。主催はドイツ・ハノーバー「iFインターナショナルフォーラムデザイン」。デザイン専門家が美しさ、機能性、革新性を厳正に審査し認められた商品に送られる。

ウェブ→
https://jp.toto.com/pages/design/

THE CRASSO

（受賞対象はカウンター・スクエアすべり台シンク・水ほうき水栓LF・タッチレス「きれい除菌水」生成器）

reddot winner 2023
best of the best

NEOREST® WX

iF DESIGN AWARD 2023

reddot winner 2023

B Book

TOTO出版のお知らせ

数多くの美術展会場構成、住宅のほか、美術館の共同設計を手がけている建築家、西澤徹夫氏。本書は、会場構成、住宅、美術館を含む30プロジェクトの、着眼点や思想の類似性をひとつながりに写真群で構成しています。ビジュアルにつづいて各プロジェクトの図面群を収録し、会場デザインと建築設計とのつながりについて触れた論考を収録。偶然現れたプロジェクト同士の共通項をめぐりながら、氏の思考の痕跡をひも解く、初の作品集です。

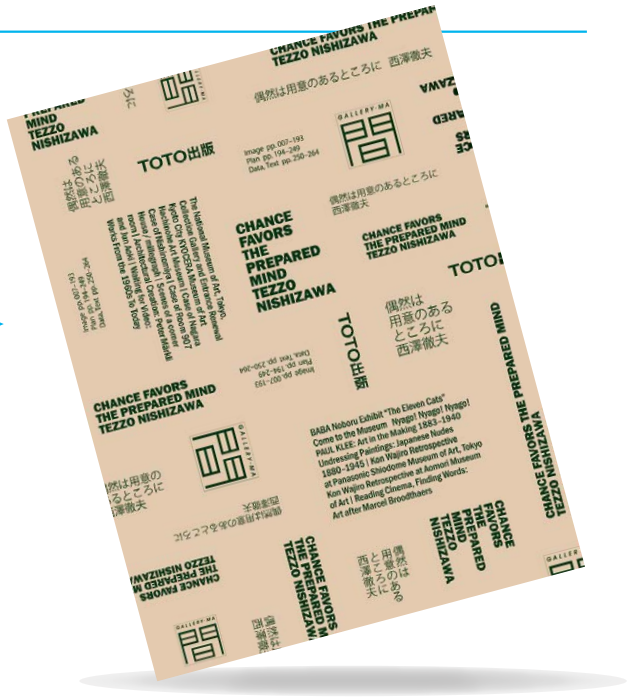
偶然は
用意のあるところに

Present!→

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方のなかから、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。

著者	西澤徹夫
定価	4,510円（本体4,100円+税10%）
体裁	B5判変型（250×190mm）、ソフトカバー、264ページ
発行	2023年9月

＊表紙は変更の可能性あり



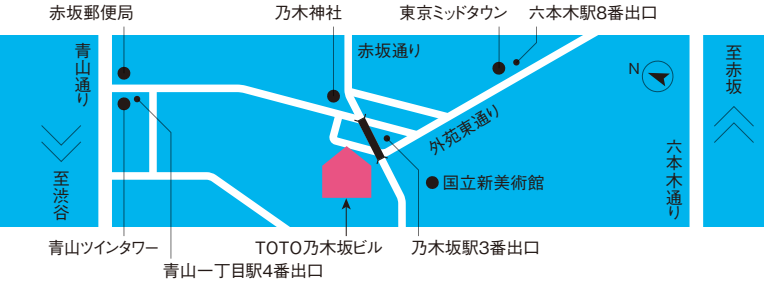
I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

3F TOTOギャラリー・間	電話／03(3402)1010 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 入場料／無料 ※最新情報は、TOTOギャラリー・間ウェブサイト(https://jp.toto.com/gallerma)をご参照ください。
2F Bookshop TOTO	電話／03(3402)1525 定休日／月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始 ※詳細はBookshop TOTOウェブサイト(https://jp.toto.com/bookshoptoto)をご参照ください。
2F TOTO出版	電話／03(3402)7138 全国の書店でお求めください。 直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。
B1・1F セラトレーディング	電話／03(3402)7134（東京ショールーム） 定休日／月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 ※事前予約制。 変更の可能性があるため、詳細はウェブサイト(https://www.cera.co.jp/showroom)をご参照ください。

アクセス
- 東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車8番出口徒歩6分
- 東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車4a番出口徒歩7分
- 東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分



C Cera

セラトレーディングのお知らせ

CERA ORIGINAL COLLECTION 自動水栓をリニューアルしました

コロナ禍をきっかけに、すっかり定着した手洗い習慣。非接触で清潔に使える自動水栓は、継続して注目されています。このたびセラトレーディングでは、CERA ORIGINAL COLLECTION自動水栓をリニューアルいたしました。コンパクトな手洗器からベッセル型の洗面器まで対応できるサイズバリエーションと、壁付けタイプが登場。ゴールドの新色も加わり、より充実したラインアップとなりました。パブリックな空間だけでなく、住宅にもぜひご検討ください。

カラー：ポリッシュドフレンチゴールド

CET1023-PF	
スパウト（Lサイズ）	127,000円
CET9010 機能部（サーモ）	91,000円
セット合計価格	218,000円（税別）

専用のパンフレットは
ウェブサイトよりご請求ください。

ウェブ→
https://
www.cera.co.jp

次号『TOTO通信』は2024年1月発行の予定です。

TOTO通信 2023年 夏号

TOTO通信 2023年 夏号 第67巻・第3号 通巻534号
発行日：2023年7月1日 発行所：TOTO株式会社 メディア推進部
〒105－8305 東京都港区海岸1－2－20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

TOTO

Red Dot Design Award 2023 best of the best

ザ・クラッソ（THE CRASSO）

※受賞対象は、カウンター、スクエアすべり台シンク、水ほうき水栓LF、タッチレス「きれい除菌水」生成器

iF Design Award 2023 & Red Dot Design Award 2023

ウォシュレット一体形便器 NEOREST WX（海外向け）

TOTO技術相談室 電話：0570-01-1010 受付時間：〈平日〉9:00～18:00 〈土曜日〉9:00～17:00（日・祝日・夏期休暇・年末年始・弊社所定休日等を除く）
建築専門家のための情報サイト COM-ET（コメット） www.com-et.com TOTOホームページ https://jp.toto.com ※受賞商品は、TOTOホームページをご覧ください。

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト（https://jp.toto.com）をご覧ください。